松浦佐用媛石魂録 一

へ遠13
708
1

天平二年七月十一日筑前國司山上憶良
謹上
大伴佐提比古郎子特被朝命奉使藩國艤
棹言歸稍赴蒼波妾也松浦佐用嬪面嗟此別易歎
彼會難即登高山之嶺遙望離去之船悵然
斷肝黯然銷魂遂脫領巾麾之傍者莫不流
涕因號此山曰領巾麾之嶺也乃作歌曰
得保都必等麻通良佐用比米都麻
胡非爾比例布利之用利於返流夜
麻能奈

領巾麾山考

領巾麾嶽は肥前國三根郡。濱崎の南にあり。むかし大伴挾提彦が妻松浦佐用媛。この山に登り。領巾は脱て。その夫の高麗に使する舩を麾し所なりといふ。佐用媛の事。國史經籍にみえずといへども。いとゆるくこゝにいひ傳たるにや。萬葉集巻五に。山上ノ憶良が松浦の歌三首。領巾麾の嶺を詠ずる歌一首。後人追和の歌四首。三嶋王追和の歌一首。すべて九首佐用媛の事を詠ず。しかれども。歌は巷談街説をとりて。詠出る事おほかめれば。國史に合ざるもあり。後生推量の説をもていふとは。當初漢土の望夫石は見ひはして。領巾麾山の名を設たる歟。又和漢同日の談歟。しひはまへがし。彼望夫石といふものは。貞婦その夫の役に行に惡死して。化して石となりしにはあらず。江山の自然石。人の立望がごとくものは年て。望夫と命る事詩文者流のつぎくれなるはし。程伊川の説は引て。鎌倉志にいへり。愚按ずるに。望夫石の事は幽明録に出づ。又石ならでも。望夫と名つくるもの。忠州に望夫樓又望夫臺あり。大明一統志にみえ。又述異記に載する。想思草。五雜俎にみえたる。石雄風。こゝ望夫石の故事の如し。六是小説者流の寓言のこと。怪むに足らず。おもふに。我邦。西国の海濱にも。望夫石と稱るもの間ことあり。又鎌倉亀谷の石切山に。望夫石あり。志に云。畠山六郎重保。由比が濱にて戦死す。その婦この山に登り。望見て惡死し。終に化して石となりたり。といひ傳るとぞ。枯骨の化石もなれにあらねど。和漢の貞婦。化して石となり。その全體を遺す事。いふくしひはまへがし。かゝれば領巾麾山の事も。推て知るべし歟。馬琴嘗按ずるに。日本紀欽明紀にみえたる。調吉士伊企儺が妻。大葉子が歌。よく憶良が詠に似たり。疑らくは後人竊に大葉子が歌

成ところて更に領巾麾山の名を設たる歟。とに數行を抄書して遺忘備る事ハ如れ博士ぶりて。強て臆說をなすほどもあらねど。ある人に領巾麾山の事を問はしてかくハ答つ。羞らふ識者の物ひ人なるべし。日本紀欽明天皇の紀に云。

天皇二十三年。遣大將軍紀男麻呂。副將河邊臣瓊缶。令討新羅。而其軍不利。時爲新羅所虜。調吉士伊企儺。爲人勇烈。終不降服。新羅鬪將。拔刀欲斬。逼而脫褌追令以尻臀。向日本。大唬叫曰。日本將。齧我臗脽。即唬叫曰。新羅王。啗我臗脽。雖被苦逼。尚如前叫。由是見殺。其子亦舅子。抱其父而死。伊企儺辭旨難奪。皆如此。由此特諸將帥所痛。其妻大葉子。亦竝見禽。愴然而歌曰。

柯羅倶爾能基能倍儞陀致底於譜磨故
幡比禮甫囉須彌毋耶麾等陛武岐底

或有和曰

柯羅倶爾能基能倍儞陀陀志於譜磨故
幡比禮甫囉須彌喻那儞波陛武岐底

八月天皇。遣大伴連狹手彥領兵數萬伐于高麗。狹手彥乃用百濟計打破高麗。以上摘要

こゝに此もて知りぬ。この年天皇。ふたゝび狹手彥を大將軍として。高麗を討しもひたれば。伊企儺が妻大葉子が。敵の城に登りて。比礼甫囉須弥と歌ひて。その夫は追悼せしを悞傳へ。狹手彥が妻。佐用媛が事とせしなり。又

人ハ異にして事の似たるにや。いと不審。さて言の序にいふ。前に記せ大葉子が歌。柯羅倶尓能基能倍尓陀致底ハ。韓国の城上に立てなり。比例甫囉須弥母耶麾等陛武岐底ハ領巾麾隅も。日本方向てなり。又えし歌の。基能陛尓陀陀志ハ城の上に臣なり。比礼甫囉須弥呤那尓波陛武岐底ハ。領巾麾隅なり浪速方向てといふなり。領巾麾とハ領巾を脱て麾なるなり。今俗のひれふして泣といふハ訛れり。因にいふ。今の仗者。人を罵りてけつでもしやぶれといふ。けつハ関東の方言。肛門なり。しやぶれハ舐べしなり。この面叱。伊企儺が。新羅王陷我臆脽といひに起る歌。六是古言の餘波なり。笑ふべし。且萬葉集憶良が歌ハ。前に出しつ。この人松浦を詠る歌にも。

麻都良我多佐欲比賣能故何比列布利斯夜麻能名乃美夜伎伎都都遠良武

憶良ハ筑前の國司にて。天平年中彼処に在任せしノなれハ土俗のいひ傳りところを聞て。かく詠るなるべし。佐用媛が事ハ。今も印婦の亀鑑として。これ城稱噴を。六大葉子が吏に至てハ。しやぶるもの多し。伊企儺夫妻の幸なれにあらずや。

旹

文化四年夏五月下浣書于魚俎橋畔之

簑笠軒

曲亭主人馬琴譔

石魂録前編目録

第一　祈鏡神社孖生
第二　陰陽贈荅名初香
第三　不識恥大得恥
第四　咏詩歌處女舌戰
第五　猖才讒好被罪
第六　含涙節婦送義男
第七　海濱失書得書
第八　錦繡和歌召遠將
第九　龍神洞狐客知命
第十　末龍華親族全聚

離別從来易涙流
那堪愁上更添愁
共揉愁到無添處
目断腸枯涙也收

松浦佐用媛

盡道神僊不易逢
誰知陸地遇喬松
降魔不用沙門杵
別有奇方制毒龍

瀬川采女吉次

只道讎家起
禍因
誰知家鬼弄
家人
本他刺客情
難測
未必豫讓善
保身

牛淵九郎清繩

瀬川采女妻
秋布

只盡蛾眉便可憐
塗鴉識字豈能傳
須知才女凌雲氣
吐出蓬萊五色蓮

擬笑反成
哭求榮而
得辱難容
五尺身誰
憇斯惡木

鼠川嘉二郎

竹終生
便直
梅到死
猶香

玉嶋（たましま）

従来實禍起虚名
累已殃人兩不情

長崎（おさき）の野兵太（ひやうだ）

こゝに著して草紙物語を浮萍の根なしごとは種として水莖のおぼつかなれいにしへ人の澄濁をしれるは説。苦は奬し悪は懲らせ。よしがとをがなとてもなれば。あげはらふ詩歌なども。伊勢物語の例にならひて。或は古れは今めかしくなりし。あれは近きはいにしへ曲にいひかえられもおほかり。時しをあれ夏の夜の短はおのが戈をもて。ぬうく思ひ。遠く揣れるはようせにあらかに易は窻の下に。あらさはなれ端書して。前編三冊の草紙となし。唐蓬大和言葉と名づけれものは。霜に後るゝ菊の操を。我男節婦に比ていふも。又この書の一名は松浦佐用媛石魂録ともいふべし。故いかにとなれば。領巾麾山に妾はかとめ。望夫石上に子を産を發端とせしかれば瀬川采女は後の挾手彦にして博多秋布は後の佐用媛ともえなしもひね。文化丁卯仲夏提月曲亭主人再識

松浦佐用媛石魂録前上巻

東都　曲亭馬琴編次

第一

鏡神宮に祈て孖は生む

肥前國。上古は葦北火國と号は。蓋天草の海中に火あり。常に波上に燃れこと。いくばくといふはしらず。これは不知火と稱ふ。和名鈔に。肥前を比乃三知乃久知と訓ぜ。又肥後は比乃美知乃之利と訓ぜ。肥といひ比といふ。和火の謂なり。此の國海に不知火あり。山に硫黄火多し。故に火の國とも以ふ。さべて十一郡。そが中に。松浦郡は彼杵郡の西にありて。海辺に属次日本紀に。神功皇后の九年四月。火前國松浦縣に見御はしくて。みづから祈て宣く。朕西のかた。賊國三韓なりをことめんと欲せ。をし成ことあらば。魚ながら鈎をのむぞしまて。ながて竿はあげまふに。細鱗魚をしまへり。皇后に

あんで。希見物ありと宣ふ。これふようて。時の人その処を名けてそのつとを稱ふ。今松浦といふ訛りとこえたり。これ万葉集第五ふ。

松浦川かわの流もう年魚釣るとたゝせる妹う裳ぬとぬ

とよめれバさいの故ゐひよせたれり。又當國三根郡ふ領巾麾山あり。松浦ふ鏡神社あり。みな佐用媛が事迹なりといひ伝ふ。或ハ鏡の宮ハ神功皇后。松浦山ふ登りて。ずづらい御鏡ゐ安置一のくれと神体とにこいふ。さるども。源氏物語新古今集ふ松浦の宮をよめれあをこれバ。佐用媛が事迹とすべきことおゞし。源氏たまくゝ君ふをしむらくハはつ〳〵るかゝこの宮をかけそちらん新古今(樂式)和歌集ふ

これらのふにさて奇き物語あり。今説出ず。聽人皇八十九代の天子。亀山院の御時。肥前國松浦郡御厨の郷ふ。瀬川健三道孝といふ。武士の浪人ありけり。その公ざ正して。篤実敦行世ふ稀なり。妻の名ゐ未詳妙

とよびて。肥後國葦北郡水俣の海邊なれ。濱村の郷士何がしが女兒ふ。父母世ゐ幸くしてゝ親族もなかりしゐバ。つゐて夫ふ負郎ゐ盡して半烏もなる(ゐ)ず。堀瀬川健三が祖父道次ハ往時壽永のころ。源平の合戦ふ。毎度先登して。大ふ軍功ありしかば。頼朝卿さとみいち相模國ふ于て一処懸命の地を一丸行地ふ。二世将軍頼家の時ふ。此二の過あるゐ忽地肥前國の松浦縣ふ配流されぬ。かくて後頑ハが子。道村が付ふ松浦ふて僅ある田園ゐ買りとめ。今の健三ふ伝ふ。されバその家富あり。ゆゑと。夫ハ武藝文学を食ふ。ゑーかくいに。妻ハ又和歌ゐ嗜て。安〳〵ふ世ゐおくりぬ。かくて健三ハ年四十ふあまれども。子といふのなかりしう。夫婦父〳〵これゐ歎くといども。とハ人かの及ぶべくふあめねバいふもさべなし。こそあれ日妻の木彷妙。夫ふいとりけるハ吾仏過世めくて。子を挙ど。子孫

こを見ようり断絶せざいと歎かしたるみなふびやうれがくて此男の乱うるぬ人の子が養ひてん木ふ竹を接くこうふて公のうねふめなふべしせふふ神仏の初子といふものもわり。當然後神社ハ靈驗新ふもりまんなれべかるる名ほぐも。夫婦力が殺して祈りをふぞやこいふふ。健三点ふくびふ鏡明神と。佐用媛が所持の鏡が神体とすれはしゆぬ夫鏡ハ靈明ふして對て照らさんといふことふ。て夫婦ら誠心を盡して祈くんふ納受志ふべしといふふおふべかふびおふ松浦佐用媛ハ欽明天皇の御宇。高麗を討つの大将軍なり。挾手彦高麗へゆくふた。佐用媛いと兼てよりそれ。大伴連挾手彦ら妻ふ。挾手彦高峯ふ登て領巾ふ脱くその紀を望く。く別が惜こ。當國三根郡の高峯ふ登て領巾ふ脱くその紀を望く。悲歎哀傷ふ人不覚ふ落涙。遂ふ彼山を名づて。領巾麾の嶺といふ。云々

の別が悲ふ負節の至ふて。五位子孫の絶んことふ歎くふ忠孝ふ感ふ

とこふなりにれがいふ」へも。「浪ふ人としてふなんは先祖へのふ孝ふ且國のふ忠ふ不忠ふり。

ふもろめやいと。浪ふ人としてふなんは先祖へのふ孝ふ且國のふ忠ふ不忠ふり。

元ふこの子の愛欲のこにせざれを監ふ神ふ人間ふあり」とその悲ふ

ふひこくべるる。何ぞ憐みふへばんいざらばふふもふつふく。祈願ふて

ほうふぎーとて。これより夫婦ハ朝ふも夕ふも鏡神社の前ふ仰ふ肝膽ふ摧く

祈けれふ。既ふ一百日ふ満る夜夫婦が夢ふ嬋妍ふれ兒女枕方ふ立在

前のごふ脣ふ開ふ嘗ふ似ふれ声ふ發して告ふ。吾我夫婦

よりのふふ子孫ふ祈ることふ因縁あり。天その至誠を感ぜ。二人ふ子

どもふ与ふふこそ。兄ふ家を嗣し年ハ母ふ養せよ。ろれども。嬪室未給妙

ふ。生得氣血足ふびれい子ふ産ふこと。し妾ふ養べ宿願頓ふかふふこし

瀬川木綿妙
夢ゆふ松浦
佐用媛ゆふ
妻ゆふ

はれあれその人は行ぎれとれは。夥の妾ありとも。子は行がし。又その人
は行ぎりといふとも。はじめにも似ば。嫡室嫉妬れ公は發をとれを。後に
子なし。いよく夫婦志はあはして。七日が間齋して。そこ行ともに。領巾麾山
の麓に到る。彼処に到れ日。かなたに薪は負ふれ賤女すあふじ。漱川
氏のみに。子は産ぎれしを。この女子なり。その期に及び。あばかりを疑
ぎして。彼が身は贖ひ。住ふて家に帰るよ。それ子どもは。その性怜利
かんん。雖さらに兄は文武の才に長ぎれど。兄弟壯年にして厄難あり。
あれ命運のしからしむれとこれなり。つが言努く疑ふべからぬ。といふ
とせへば遠寺れ鐘の音枕に響て。暁方ちかくなりにけり。夫婦夢さんて。
送に入ふる旅は拘がれに。符節は合をがごとく。實にふ思議の霊
夢なれば且かしあみ且飲び。これ疑ふぎくもあらぬ。佐用媛の神美日耳

の祈願は納受あつて。かく詫宣はしまふなり。末世といへども信心の奇特
なり。いと尊し。と信ぎらく。夫婦飲びしかる限なし。そのとれ健三ハつかく
と尋思して。木綿妙にいふ事。神の告答といへどもいれ弱なりしより色
は好まぬ。別又樂で淫せず。夫婦の間眤しければ今日に至るまで面
を赦うせし事もなし。加旃。富貴栄耀の身にもあらで。妾は養んは驕
れに似たり。これつが志にあらぬといふに。木綿妙は使もあへず。なるゝ心も行ぬ
るは宜ふかね。つゝは年耳はれそひ行ぎ。ど世あしくて。子は産ぎ七去
とせふん。子なれ妻は去といはずや。しかれを。なほいと惜すふことわらは今
親族もなくなりて。帰れに家のあらぬ故なれば。かくまで夫に功なれ
その身は親護おぼして。神の告さへ用ひまはじとなれば。つが身ありとも何か
はせん。速に身の暇はなりて。ともかくもなり行ふんといふ。その事色ひ定め

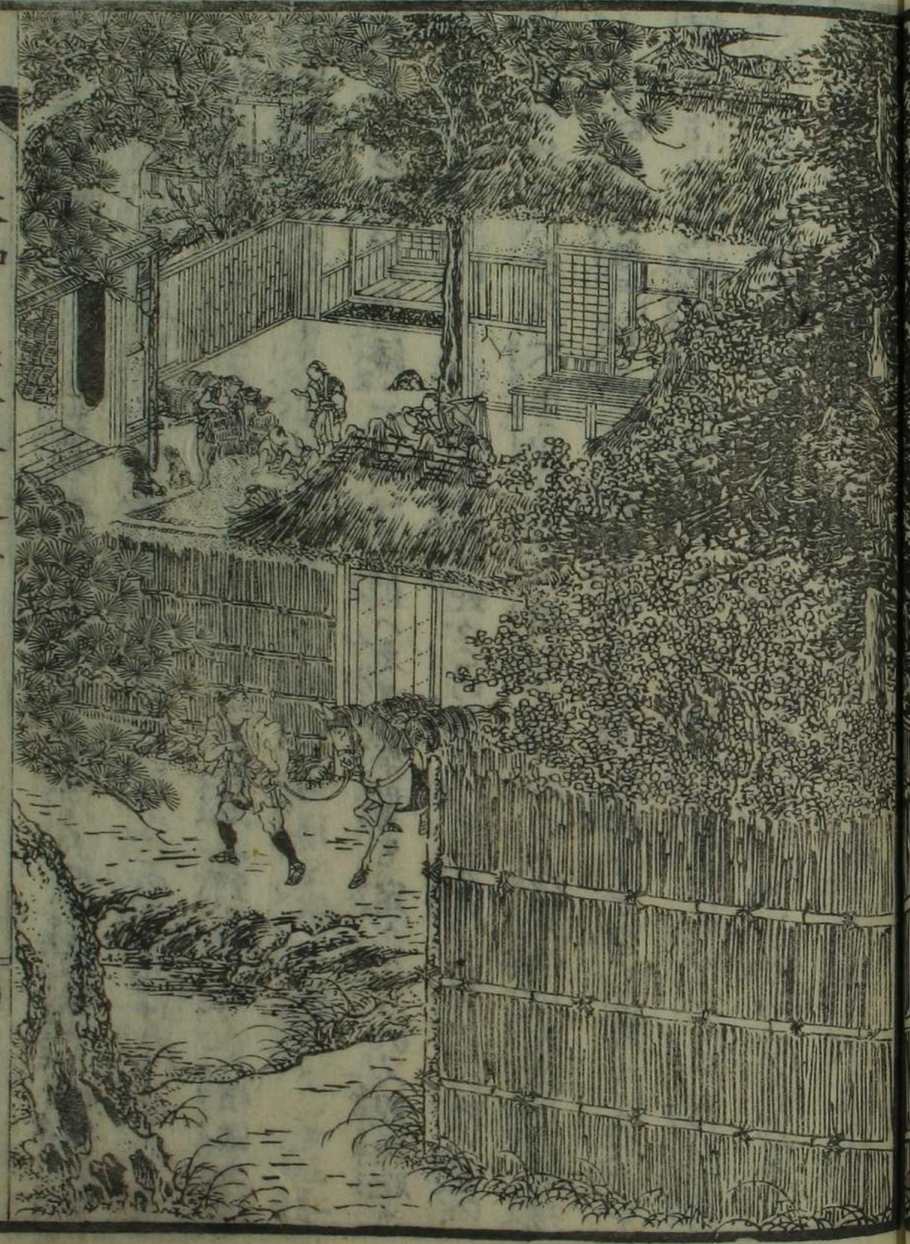
ありとこゝいゝれふ。健三ぬかく感激ーびふ。ひそ悦ね。一旦妾ふ養とふふも。子ざに産ーなべその家みかくそう。とし親族なたのかふば。他ふ遣嫁それともいと易うれべりれど。それ困く。異妻ふ襲うは何とふんとふふ快かくで今のごとくにかゝえーなう。にいうれうふ默止がとし神の告ふ従ひまれれとし。と意ーかび。木綿妙ふく飲びく。次の日より。夫婦斉それことも七日ふ及び。さて健三ふ今益十五ふなりける。若党村沢俊平としふそのふ。縁由を説もふして。これふ家ふ守らし夫婦うらほれたちそ。旅中驚山へ赴きぬ時ふ文亀元年。二月四日ぬり。彼俊平と申すは文明の頃より孤ふてありけれ。健三夫婦ぬかく憐みく。召使ふ徒ふ彼又庇厚の恩ふ感りて信く忠義ふ仕ふれそ。健三ふこれふまかせ。太刀合そそれるのなども教うり。て洲川夫婦と松浦を旅ぐち。日ぬりてところの漫行ふ下ほふ公うのち。

てこ根郡領中驚山の麓ふ名そ。その次の日。乾ぼぐれより。割籠などふ用意し。旅宿をくち出ふ終日山のめぐりふ昏ちかくぬりふりれど。絶く一人の女子ふも逢ぞ。こゝ不審まぐく。と詫宣ふ蒙りたれふ。さてふ至くその北を乙せるつねは。いうぬうのぞ。爰ハ五臓の煩より成とふべはこなそそふたのめして。都迄ぞうふなれ。誘ふく暮ぬ間ふ昏夕歌ひし旅宿ふ行く。今一夜ぬめりとし。翌ハ松浦へつくべし。羊弱きうのふ家ふ泊そうれ。ぶ公うとし。とふふ。木綿妙ふいと本意なくて暮れく。ふ惜めび何とれぬくぬうに足ふそみうれく。夫婦後ふなり先ふぬり。舊の旅宿へ赴うね。洁処ふ帷まの山道より。柴を負ふれ賤女。羊ハ二十れうくふ。半さうりと乙えく。海松のごくかそれたる。楸の蔽衣を被て。髪ハ蓬ふ戴なう端ぎぐく。路ふ横さはふ走るとく。端なく。健三夫婦ふのうり。夫婦ハ是なん神れ告

まひし女子なめりとそふに。前の疑念も。いまはふに畏おぼえて。連忙しく呼
とゞめ。はふ〳〵これハ形貌こそ窶しけれ。顔色おのぼから美麗にて。村酒
の人を醉し。野花却風情あれがごとし。件の賤女ハ。ゑくりたれのこゝにて。久し
くハ立もとゞまらぬ。ゑふハそ家路へいそぐこそのあり。路に迷ひまつぐ。さらく行
かさかはえまへ教はいふせんといふ。健三答ふ。いな吾們ハ路に迷ひたる者
にはあらぬ。故ありて。今朝よりしらに来たり。終日そあるとかはけるし。その
故ハ箇様〻このゑなりとて。はづ名氏が名告。はていふ。わが夫婦。年
来子のなれを歎れて。鏡神社へ祈願をかけたれに。いゆる日。夫婦が夢に。
佐用媛の神灵詫宣あり。この山の麓に到て。薪を負る賤の女に遇ひて。
これが身が贖てく妾とせよ。子ハ二人はぐ産ぞれぞと告あひたれが。神
慮の灼然なる。果しく違ひぞ。かく神の孕れまふなれば。明白にはゆるし。

けれど夫あらはそれもかひはし。家ハ何処ぞ。しらしまへとて。夫婦言が存し。
首尾を告れる。いと信ずなりけれハ。賤女ハ心ひもかけぬ氣色にて。忽地
に向が殺し。神の導れまふとて。数ならぬ身が懇望しまふ事。心ひ又れはへ
がくこそ付れ。ゑが身ハいまぞ夫も有て。父母兄弟はさらしたのしれ親族も
付らぬ。いわれ年より。この麓の北在郷なれ。濱添何がしが家の下女となり
て玉鴻と呼れ付り。既に主人にうちはりせし身なれば。心むとろにて恋がしし。みづ
からともかくも談合しまへ。郷孕いたまゞしといひかけて。先に立つ行形勢いと
かひぐしく見えしかば。瀬川夫婦ハ面をあはして送に十二分の笑が含み。後に
跟てお行程に。御門なれ。冠木門ある家に到つ。玉鴻を健三夫婦とゑくへ
ゑて。しばし待まへ。あるじにかけらんとて。聽て紫が扛おろし。忙しげに奥へ入り。健三
木綿妙ハ門内に立在て。彼此とゑるに。里にてハ由緒あれものとおぼしくて男女

玉嶋小御導
せしかて健三
夫婦濱塚か
宿所ふ来る
せ川健三



八九人と牛馬四五疋あり。あの撓み柴小屋を建てゝくれて。薪秣かりれ物を積
おくりかくて玉浦生まれりて。健三夫婦ふ對ひめしのえをほゝよせんとや
なれふ。誘ふとて。いとく庭門より。書院めくれ処ふ到ればゝ主人の濱添出迎
て。送ふ姓名ふ名告り。中定りて後。健三ハ由縁を審ふ説そうして玉浦
ふのりのくといふ。濱添これふ又親同胞も
ある事ふゝに。いわれ羊人肉経紀がこの里へおて買ふ所り。おのれハ里の
長ふそむこにさこれ不正ふ事ふ件の人肉経紀を捕
く縁故ふ穿鑿」女子少は親里ふ向く。送りゆくそぞくもひほろこ彼を
拐拏にとれふ。唖斎ふどふ外や吹一たりけん後く一言もものいふことゑ。
不便ふれハ女子ふハ家ふとゞめて下女とゑ。これを玉浦と名ほくてうにれど
縁故分明ふよふげれふようて。已ことを。五駄の薪ふ人肉経紀ふそうして。

故ありねゝきうれふ玉浦ゝ。その事ふを聞てその事ふかさゞ沿ふ。
如此ここにく。なるべく家もゆふべとらふ彼ハ誠心あるものふて。北山の稼ぎ人ず
彷彿てようもそれれば。放遣らんよ。役なくハらくぞも鏡の神社の託宣ふよろそ。
かく叮嚀ふけえりふを。推辞ずにれんいともかーと」彼ぶに異議うくハ往ふ人
肉経紀ふそうじたれ薪の價ふの。進ずせりんと回答く。玉浦ゝえゝと。
汝この客人ふ伴ひて。松浦へ行ぶ」やと問ふ玉鴻答く人の婢妾とおらんよ。
行ぶ」かくばれんども往ふ家公ゞ庇ふようべいるゝは芳たれ女おなれるぎかりて。
ゝうれふ如くこの事ふ責て人肉経紀ふそうじりひ」薪の價を償んえよう
の志ふ行りとふ。於是談合一決ゝて。健三ハ妙ふ欣び斜ふべ。主人がらふ
ふ仁ゝと。玉浦が分價ふ遍与。なほこの外ふ當ゞの謝物として一封の銀子ふ
贈てければ。濱添ゝえ玉浦ゝ衣服ふ整この夜ハ健三夫婦を留

て。厚く款待けり。にて健三木紗妙が次の日早飯果て後濱添ふ別を告ぶ濱ゆ
ゆきて。松浦縣ふ立ゆるに玉浦ふめぐし夫婦に。羊羹の庇を訣びけゝえ傷輩の
男女ふも。ひとりくに辭別。裳袴折草鞋穿ちめて。ゆるともにこち出りしが
やしうば玉浦ふ松浦ふ到てくより。健三夫婦ふ誠ふ盡して住るふぞ木紗妙
そのざうも好と思ふ氣色ねくこれ怪嗟むる。骨肉ふ異なふばぞれ鏡
神社の冥助ふよりけん玉嶋かその月より有身て。十二月上旬に安産せり。健三
も木紗妙も。彼が氣色孕てえいるこゆより。起居ふつけて心ふ用ひもちゐ
祈ゑの違ざれをるみく。信心懈こと勿り。産ぬれ子ハ男ぬて。ゆるも
孫なりしかば。ゆうく歎びて初生兒と定めて。松太郎と名つけ。後ふ女兒ふ
才と。浦一郎とぼび。日子狂て。鏡神宮へ宮ふりさ。子どもらうく後
を祈て。塵さへそえぞ養育み。母の乳房をーかぐりけばぞ二人の子ども

そそくよりに肥立て。その容止の似とれる。二顆の珠を重たれがごと。這くび
たて。立ハ歩行めと。そくが世の中の親て。なれふ。木紗妙ハうる産る子の必
ひをねてとふかくに玉嶋をえ勸ばぞ王嶋そ又子ふ産てもいよ〳〵已ふ卑て
木紗妙ふ敬冊くことなめて。彼ふ羊の暮うをそやく
ぞえ文意ハ只一年にく盡く。弘長と改元めりけて。明ばぞ弘長元羊の春。
鎌倉ふ前執権北條相摸守時頼入道そうかう諸國のる濩ふ人おが
好曲ふ拐て民のこゝ病ふ氣と披露ち。密ふに國ふ行脚くのひけれ九州ほでも押
けれゆや。弘長二年の秋鎌倉に立ゆりて。名ふ舉悪ふ罰ふの叙ふ肥前
國松浦縣の浪人瀬川健三道孝遠ふ妻子を倶ちく。鎌倉へふるぐをば。ふ
彼國の守護ふ仰ほうさんをかくて瀬川健三ハ。ひもかけぞ俄頃の

よろてこれをも取あつめ行装を整るに。木綿妙衣いつもちくおり。玉鳴俊平ホ。これを祝して用意既ホ整ひぬ。そのとき健三ハ妻と妾ホはべらいのう。今度鎌倉へ召かへさるゝ。それホ玉鳴ホ倶てほいくべき色を好むの譏脱とがにし。且この地ホハ父祖の墓もあれバ玉鳴に二男浦二郎を属て。残志そゞめんと必ふおりうゞ所持の田園その半ハ沽却て路費とし。半ハ玉鳴親子う衣食の料ホそふべきをし。元来少許の田園なれホ今又その半ホ減ぜバとて屋を潤すに足ふべからんとも。餓ホ凌ぐに便あり。且既ホ万里ホ隔てハ再會期て揣うとし。永く別ホ決そべきといふホ玉鳴ハ心ぐるしく意もせど涙ばしくて居なりひたホ木綿妙これホ生て夫ホ対ひいうおれバかゝ公ばよそうホあふ平人のうへホても妻一人妾一人ハあるの例今玉鳴ホ倶ふとも誰うらこを好むと必ひ給ふべき加之二人の子どもらハ今茲ホうゑ〳〵こ才なれバ何とももちひ

ふべきホあらず忽地ホ引分るハ物と忍ぶべきのみホよ。彼ホ又物の分ホおふ至りて。一人ハ父と兄ホ慕ひ。一人ハ母と生ホ忍ひ。ここそ形ホくめぐられ宜ふるのあいめれど。乞のみそうひ引かしとのふホ健三ホ妻ホうち掉て。ろ妻れ言葉過てり。曩に佐用媛の神昊穹ハ母ホ養せよと詫宣のりしを忘れのひろ欲ふれ元木石にあふざれバめゝくゝ幼ふれ子どもら死。いばら〳〵と曙ふんやと。今日のうちにもひあいそれバ一人を棄よと告のひし。神意ホは悖がし。玉鳴も亡世より定れる。業因とも思ひ諦めよ。老ホ養ふホすめり。餓ホ凌に田園あり。寡にくゝふんとも。人の妻となふんそも。こゝ程の隨ふれどとて理ホ述てくけえちふれホぞ。木綿妙ハ重ていらふぐに言もわく。不覚も落涙ろうちけて。玉鳴ハ情由ホけゞくとやそ〳〵潜うちかこ。神意ホ仰ぎそれと宣ふをとかくやさんかうハ行ふべき是今生のおん別ぶこそ

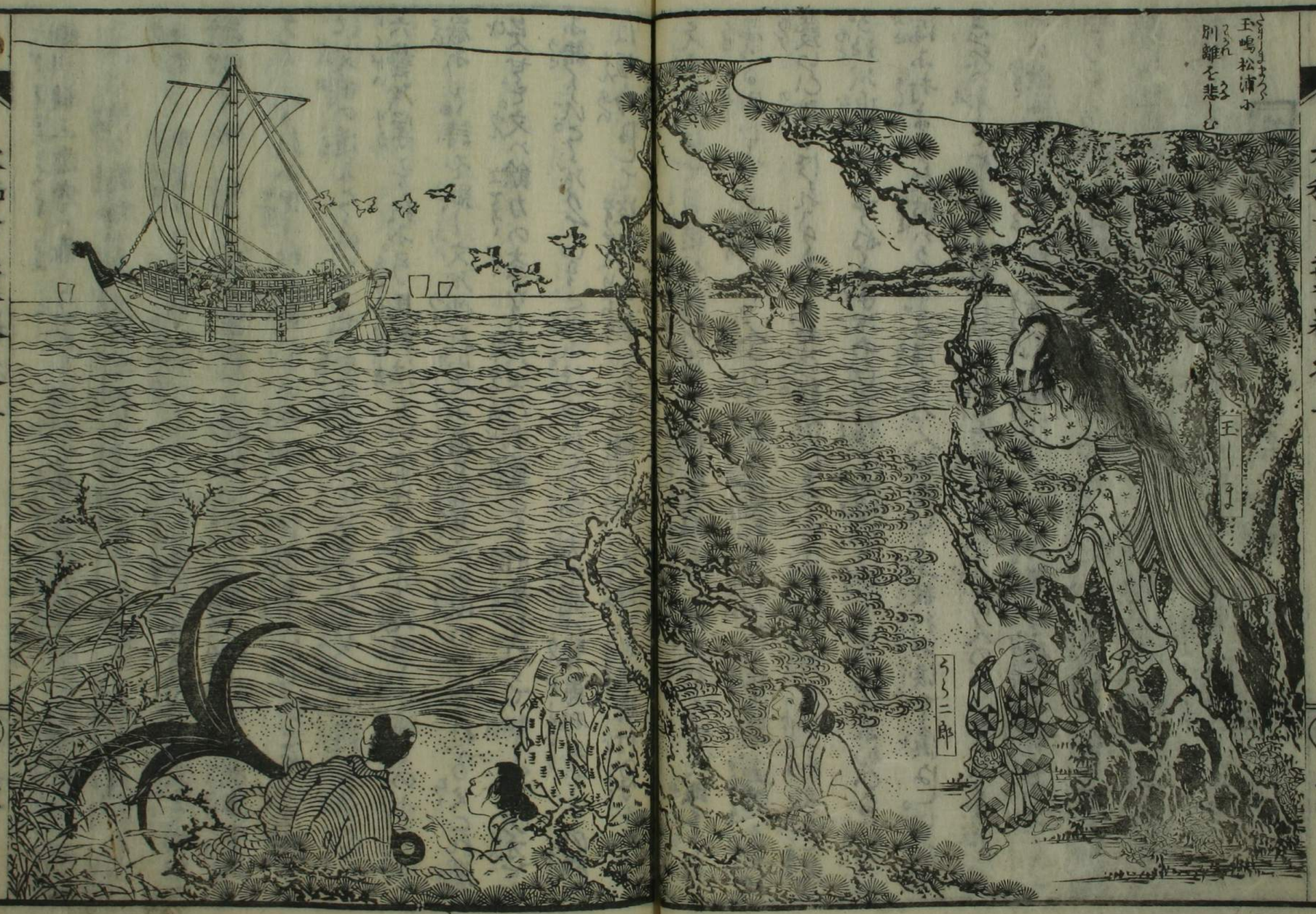
おひ行れ。たらなりとも。つゝみいくそう他ふれ行りく。愛子ぶまつり田園を遺
りふりくいともかくとして守言時ぶ行りなん。親子兄弟の契竭ご神もめぐれ
ごこそおりさば。よしや夥の手ハ孫るとも環會しまふ。と健氣ゐハ癒くくを。
おさごこゑなる袖の露。滴ごとくぶ泣ひり。ゐ給ゐハ五郎がこゑぶの中を推言り。
よゝと泣くく声ぶ惜まず。健三をいと不便ゐめれど。公よりくてハそひ化。さて
村長をはじめ。郷人ゐに。五郎と浦二郎ぶらのみぶえ。私ぶよりひゝんとて。
あ三日風ぶ村遂ゐ木綿妙。松右郎。俊平ゐぶ行く。覺ぶ解ほどく。郷人ゐも
名殘ぶ惜みてこれを送ゐ五郎ハ浦二ぶ抱ゐく浪打際ほゞおくり出。
ほそう別の惜ゐれ。ぶまで泣ふけれかくて私子ども八追風よと罵了
あひ。碇ぶ引揚帆を立くく海原遠く糟出せば。いとゞ涙の五郎ふ稚児ともも
音なく。覺を引放され。撲地と倒自くく又分ぶ起一。澳の白帆の波間がくれふん

えざるほで目送れば。私の内ゐも健三夫婦。遙ふ浦曲ぶえうりて。眼をうら
曇る潮けふりふ。霧うらくとなりゆくゆゑぞたりひ。紛ても悟ふめて。五郎と声ぶ
發いひ。ぶ一ぱいぶもめり。私の私名どうくてよと叫べハ共ゐ浦二郎ぶ父と兄と
ぶ紛ぶ追ひさゝゐるまぶめぐて。招うほびつ母と子ぶほつふかひるん松浦
浮ふ打よとれ波ハうれる帰らね人ぶひろぶ。数行の涙ゆ袂ぬ。げふや悲
ゐたへ死てわるゐ今般より。生別こそ悲ゐれと。昔の人のいひんぶつ分ひと
つの秋ゐて芦ぶ花散ゐ浦風ゐ招ゐほしく轉輾べそ。郷人ホ憐てさぶぐゐ
いひうらく家路ホ伴ひ帰りけり。

第二

遂ホ脱ゐとど。栗ぶ種てハ栗を明
あひ一五郎川の妻なる五郎をこゝに遺一おくいとも高しと契りにこそ。

陰陽贈答一ぶ名初て香一


玉嶋松浦に
別離を悲しむ
玉しま
うら二郎

瀬川健三道孝ハ妻と子どもを捨て鎌倉に参ぜしかば。時頼入道對面あつて。彼ホ夫婦が年来の徳行を賞笑しまひ。さゝあつら祖父の流刑を宥免あつて。剰新地百貫が宛行ふるゝよし。御教書がまゐりしかば。健三ゝ始かく君恩が謝しまゐり。遂に鎌倉に宿所を営こ。奉公他に萃て。誠忠を盡しまゐり。しかれに児子松太郎ハその性極て怜悧。年六ッ七ッのこゝろより。教ざるに文武の道にこゝろをよせ。一度学ばれるが忘れず。父母ハこれを奇しとして。六藝が学ばれに。弓馬剣法そいふもはらなり。文学手跡その才に抜十歳にして。詩を賦し文が作れ。寔に居易菅三の風あり。しかれども父これが賞笑せず。文ハ餘力の学なり。只士は武藝こそ肝要なれとて。秘してその才を人に語らず。こゝがかていまだ世に笑ゆれことなし。夫生死ハ賢愚邪正によらず。顔回は短命にして。盗跖ハ命長し。されば瀬川健三夫婦ハ。忠信徳行の学をありて。

終られ家が良とゆいへども。惜ばし。天これがゐに壽が授ず。今茲文永六年の秋のこゝろ。風のこゝちとて打臥たれが。茶餌もその驗がえせずして。夫婦うちはゝれて。世が去にければ。松太郎ハ僅に十歳にて孤となり。雛猿の枝に離れるごとく。追悼の涙乾く間なし。實母玉嶋才浦二郎といふかの。松浦にありとはゆえながら。生死定かならず。父ハ元来物がたくて。木沙妙がしのびやうに消息して。安否が問んといひたれども。大に制して一ト云ひも音耗せず。骨肉の恩久しく終たり。只若堂村沢俊平のみよ。ゝ給づ信じく傳きて。後のゝみなどを叮嚀にとり行ひぬ。是より先時頼入道ハ弘長三年十一月廿二日に。享年三十七歳にて逝去あり。嫡男相模守時宗父祖の箕裘を嗣て武家の執権たりといへども。いほど弱年なれにもよつて。恩遇瀬川が孤に及ばず。松太郎ハ十七歳に至りて。はじめて近習に召加られしかば。さゝあつら松太郎が更めて。瀬川采女

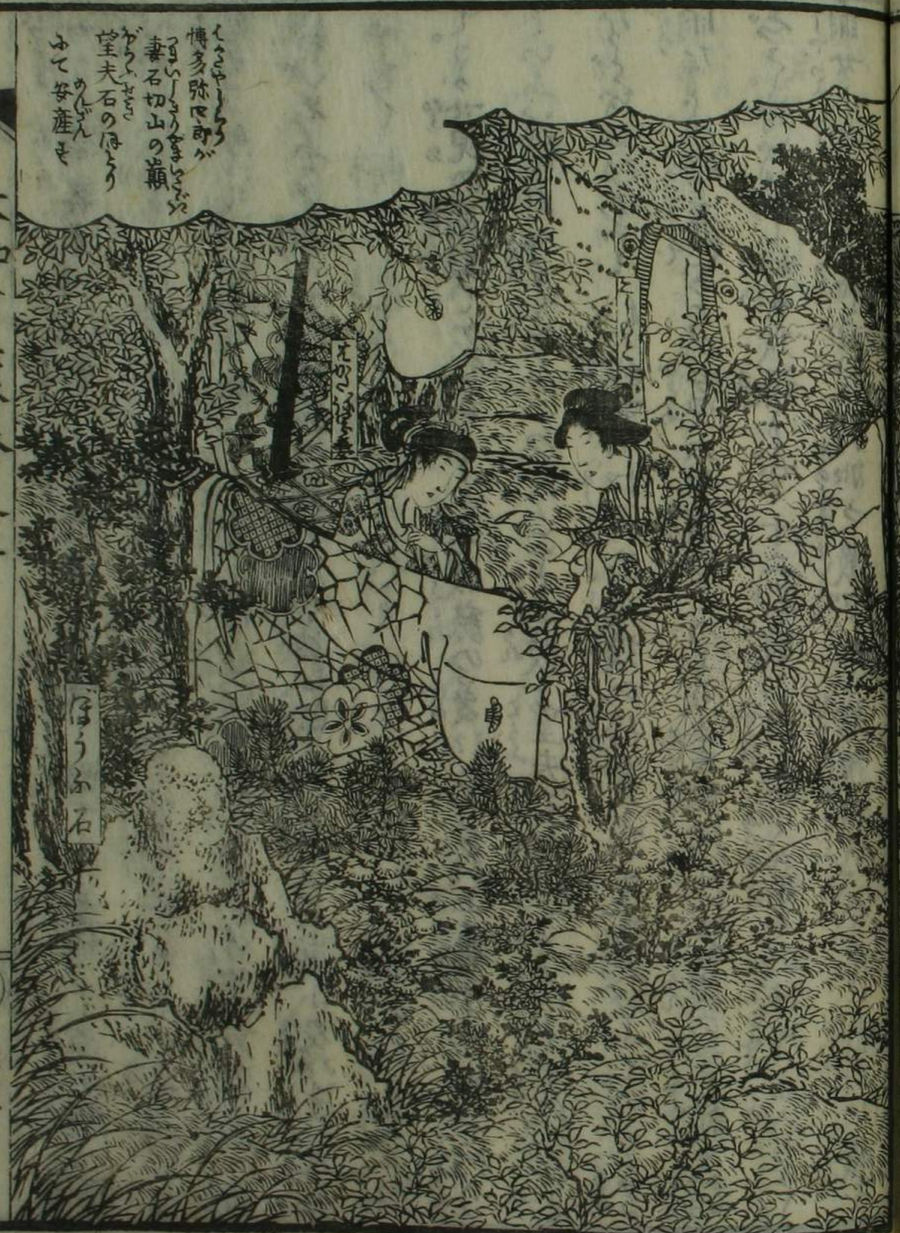
よしづの
吉次と名告り。忠勤父よりもまさりぬ。いとかも私なく。いよ〳〵武藝を励こ。文孝と
う嗜み。君のおほい命を塵埃ほども惜ほど。古老も既ふその才をもつて。當世の
双の壯佼なりと稱ありけれ。これ
素久が從弟に。悟らず泓四郎。素延というのありけり。妻を娶て十年にあまま
まどろも。一子ぐにならりしぐ夫婦これを公うく思ひおぐ。その男嫡家ふめぐれ
ば。海く後のう死てかくともせざりけり。ふるれふ文永二年の冬のれ夜泓四郎が妻假寐の夢に。五衣ふ緋袴ふて
れ兵女まに一面の鏡を合て。枕方ちかく立在りふはそ肥前國松浦縣ふ住
ものぞ。ふぐしなるこれ胎内ふ宿りぬ。この年ふ子れおれるの死ぬ。
泓四郎が妻夢ぐ後ふ。ふぐ夫婦。
ふぐ胎内ふ宿りぬぐ。放びこれふほとふとと答れふ。上箱うち忘ぐ。

屏風の後ふ入るとおりへ夢さめたり。ふのまうにふ思ぬ驚れへ驚て夫ふとの
う死物がたりぐ。泓四郎。ふぐ思ぐ。ふぐ思ぐ。尋思ぐ。彼兵女まふ鏡ふらて松浦乃
ものぞとゆえそれれ。松浦佐用媛の神灵ぐ人ふ教件の社ふ鏡の宮と稱
れる。神体へ。佐用媛の所持ありし鏡ふ。崇祀ぶべしと。豫てある人の物語ふ
てありぬ。ふれふあぐんとふふ。妻はぼちぐ怪ぐぬ。かくてその年の終りぬ。
泓四郎。妻有身ちぐ。夫婦ふよりぐ歎ぐて妻ふ毎月ふ。亀ヶ谷の壽福寺
へふ詣ぐ。安産の加持ふ受ぐ。
黨閑筮七とふのぐ。侍婢女人ふおぼぐ。例のおぐく。まふ福寺へ詣ぐるかへさ。
この日重陽ふれば。寺の西南帰雲泓の南ふれ。石切山ふ登りて野菊の花
ふ摘んとぐ。この山の巔に望夫石と稱ぐ。人の形ちぐれ石ありぐ。縁故ぐ
れふ。仕附土御門院の元久二年六月廿三日。重忠一家讒者の舌ふふ係ぐ。

滅亡ふ及ぶるとて。重忠ハ二俣川の上ふ于て。流矢ふ中て死と。時ふ秩父六郎
重保。藻倉ふあり。すみやらに討死と聞ふ重保
妻。この山ふ登り。夫の討るゝ体望こゝ。潜然として啼泣。自害して失うし。
その屍化して石となれ。時の人唐山の望夫石。我邦の領巾麾山の故事ふ
擬ふ。これをも望夫石とぞいふ。それ紅ふ博多法に所う妻ハ只管典う
乗こゝ。石切山の巓ふ登り。望夫石のほとりに至るとそ。忽地産の気ほこりて。
時刻遠うふ。とゝいふに。侍児どもも大ふ慌忙ぢて。せんとて立さるゝ。これと山中
うれいぶ。扶ふ主人家もわく。すべたもめぶるしふハ若黨笠七。ひしく物し
て。おのく徒の小袖ふ脱こ。これふ小松の間ふ引めぐらして幕とる。咲みぞろる
菊花折布て袖ふしとゝ。とゝく勧れはとふに郎が妻安ふか小産ちゝ。王を敢く
ばりぶ。女児出生ぜり。この壽福寺へ送こゝ。寺より人を走じて博多

ふに郎ふかゝく告れふ。ふに郎ハ且驚ひ且歎び。驕て迎の轎とけらして宿所
へ扶かつしこれふ母も子も恙なくて。日ふ追こ肥立けり。この児重陽の日
ふ生れ。もろも菊花折布て袖ふかそれはとて秋布と名ばけゝて。菊の異名ふ
秋ちゝくの花とゝいふがゆゑべ。夫菊ふ異名多ひ花ふて。唐山ふこれを。佳友壽客
節花女華女節女空更生陰成傳延年笑靨金日精周盈潔藟
黄花帝女花以上十五名とゝいふ。おのく生処あり。集めて余國用ゐ事物異名ふ載
なり。又我邦ふてハ菊花。ほとり草百夜草星見草秋見草よろひるよ
ちゝぐり艸かハもゝ艸かよりひ秋の花をとめ花いうて艸
山れ草長月花草のこ秋ちゝくのさといふ。かゝほで世ふのとりけを秋ちゝくの花
この外證歌多し。又冬の菊ふ初こ霜こゝ霜ふ枯ぬるを以上二十名、こ
いふ菊玉抄ふ莫伝抄藻塩草ふそとりにれべ菊へめでたき郡ふして。漢ふ

寿福寺
若ふうみの七


博多弥四郎が
妻石切山の巌
望夫石のほとり
ふて安産を
ほうふ石

女節。壽客と呼び。和ふ少女花。ほうり草と稱て。箱ふ後う〳〵花の操ふ貞女のうへ小譽られ今博多ふに郎が女兒を萠ふ乘りて秋布と名づけしを故あり。かくて泳に郎夫婦い羊羽の宿望ふ果ちく。今との女兒ふ拳ちろは。欲ひそふ浪うみ。揮ひの花と愛慈む徒ふ。秋布二三歳ふ及びて容止ほとく〳〵玉をのく刻成せるごとく。てつふ女兒の面影いこれが生〳〵年假寐の夢にうさまし止腸ふ。よく肖て仿りといふ。泳に郎夫〳〵ひふいろ〳〵ごとく。彼が望夫石のほとりにく。生れしことなど沉ひめさまれば秋布ハ松浦佐用媛の後身ふてそなるべくとて。いう〳〵る閑なく〳〵守育ごの女兒六七歳のこうう。書更ふよく。和漢の書籍を諳ぎく。詩ふ賦く和ふ泳じ。年十二三歳ふ及ていふ文章その佳境ふ入りく。謝女小式部ふも恥るかとびく加之教ざれよ織績ふ巧ふよく。戲れに機を

立てく錦ふ織出さに。ものぞく是稀なれ少女なり。父母いこの取扮ふえてめりに才の長ちくを怪こと短命ふやめんく〳〵て。年のそびに公竹学ちれる父許さく。秋布十五歳ふ成りて。母ハ村病の積聚ふく。遂ふそうなくりにければ。哀慕の涙ふれかさるく〳〵て。詩歌ハおのぞうら廃うりけれ。ちれ小軌格時宗朝臣の母公を南殿とアせーが。その性風流ふうにおかをれをりて。才ある女子を愛しふふれば。秋布がる父母及びうひて。父の泳に郎ふ仰つくさん。門くの使をりて。頻ふこれ祝ちれりり。時ふ弘安二年五月五日。秋布ハ母の忌もうのふふく果ちれよ父の泳に郎。南殿の西使祝りく。大ふかーとほり。俄頃ふ秋布が衣服をかい猶い。轎添の竹婢二人小譜代の若堂関義七なえ副さ。南殿へふ〳〵けり。かく〳〵秋布ハ夥の女中にうひつ。動格の母公ふ拝謁しもるその為体ようづれ節ふ稱

て。手耳給事れ老女といへども。及ざれとこれあり。南殿ハ目今秋布ゟ言行のめぞ
たれを商して。近くおれ。そちが手ハいく程ぞと問ふに。十五歳になり侍りと
ほうれ。又前ハ何のゐに嗜ぞと問ふへば。そこに引退れて。

和歌の浦にいさゝぬまでも紀の國やこれなぐさのまゝと云の紫

ゆこゆせしかハ南殿をはじめ居り。側に侍れ物。公あれも公なれも。志じ感じて
己ざりけり。浩処に老女一人。小四方に五把の粽を載されを捧をちて。おん前に
こゝあり。相州時宗をの四方より。端午の慶賀として。進ぶせまひと披露されバ。
南殿ゑまひて。時宗ハ近曾これて政事に暇なくて。忘ひの外に疎くおハせど。
彼人いまく健わらば。これにはまを飲びほし。猶さゝ菖蒲の前句が祝ひて。此
贈をのあり。それこゝあてへて。ほとりちかく居よしまふに。彼粽に短冊を見られ
たり。打ゑへしてゑまへは。その歌に

ちかれやま
まちかさ侍ね
さくながら
こと問もせぞ
ゑるハ遥ぬる

とあり。数回うち吟じ。大に感じて宣ふ
せう。此前ちまれ八把まゐらせる。といふ
十字が句毎の上下によみ入れたり。在五
中将のかゝ衣きつゝなれ也と詠て。これの
ぞこれ句の上におれたれハ。八字にあらず。
これ十字の折句なれバそれにも勝まり。時宗ハ連前が嗜みまへど。和哥ハ使え
ず。猶さゝ笑ゐなれど。ゑもなれぬる迹なり。日来近習の若殿原にも。かくはぞ
に前が詠出すべきものありとも見ず。只それかとしられは。瀬川采女とせぶん以ふ
その。和漢の秀才なりとす及びけれが。此ものにくやゐるらん。さてを能されの
かゝと頻に賞笑あつて。秋布が方がゑまへハ。秋布ハ今この前を使て。こゝ語に
深く感吟し世にも又かゝれ才子ハありけりとしへり。そのゝれ南殿秋布に宣ふ

ゆう。相州さぬくこの秀逸ぬ称ふれあれぬ。返ぬせいぬ遺恨ぬことぬめよめ。少女
つぐみふ。ちょうぬ十字ぬ折句ぬて返すいっせいぬを仰ぬ
れぬぞ。秋布ぬこぬやひうぐぞぞ。固辞をされぬなはぬぐぐ宜うぐれぬぬのく
推辞やさんぞかぐとかれぬ」ぐぬ。聴ぐ料紙硯ぬ呂
と。彼がほうに置」ぐぬ。秋布ぬ泳ぐ業」煩ぬ風情もなくてさらぐぐと書写め
いとおさぬぐ称うぐぬて。献れを。南殿文を者ぬ受乗」て。渡ぐさうぬぬのぬ
と泳ぐなう。これ又らされ五把りてやや
ぬとぬう十字ぬ句の上下に置ぐ。歌乃
ぐ称明らうぬま遊又世もめぐさうぬ
かぬ。南殿ぬぐ吟ぐて。貴敬じめのぬ
ぬもぬやぬ。誠ぬ北なれ才女称うぐぐ。

（一）ちょ狂とも（六）
（二）ぬぐ称めうぐ（七）
（三）ぐた員い（八）
（四）これやぐろ音ね（九）
（五）ぐうはとぐぞ（十）

ぐされぬしぐえぇうひ。ゆぐて件の短冊を文箱ぬ入れて。相州の御方（返）おぐらし
うぬふぬの日時宗朝臣ぬ母公を慰めぬほいうせんみる。近臣瀬川采女吉次ぬ粽乃
ぐお代よぬし。こよぬ透なりとぞひうぐれぬ。南殿ようも返事ぬりて。ぬから
ぐぞ称ぐぬれ泳ぐうれぬぬ。大ぬ感公のぐて。汁もえよとて。吉次ぬ彼短冊ぬ見せ
ぐぬ吉次も古代巻てこの方に驚嘆を。時宗又宣ぬゆう。母公和歌ぬ嗜みぬ
ども正風ぬ好んでかれ滑稽はようぬ遊又自筆にめぬ。
ぐ且その筆勢光明皇后の風ぬり。何ぬのぐぐ母ぬ代まりてこのお代泳ぎん。
いぐ不審をめれるなぐれ面のぐう御をぬんと宣ひぐ。この日の制度をぬ果
て。瞻香ぬ及び。竹をぬ泳ぬ訂素延。瀬川へ主の太刀ぬ持ぐ。博多と共ぬ廊のぼうに候じ。
ぬば。母公ぬぐて對面ぬう。瀬川采女吉次のみぬ称ぐ。南殿ぬぐうぬ
奔ぐくひを低なりけれ。そのとぬ時宗朝臣は。端午の慶賀を述べまうして後

宣ふやう。卿ふまつりたれ返事ハ遅きをもてとがめ
らるゝおぼえくれどゞ仏自筆なるわふ
らひて疑ひあり。何人かよはしまひしと。南殿微笑
をうかべ。彼ら兄弟ハ。彼ある男がむすめ女児ふ。秋布と呼ばるゝのなり。ふの
ゝの和漢の才女あて。錦ふどうへよく織とやらいへりふ呼よばはして試うに。人のほう
ことと二ふ。虚言ふかゝりしとて。とゞめ給ふり。大和言葉ふの。ふ仮名ふえ志しまふ
ゝ。時宗朝臣ふく甘吟めて。彼秋布ふ呼よばしふ。面あさりつゝまや
もくこそ宣へ。南殿苔ふく。彼ふは次の間ふ休ひり。ふく〳〵秋布を召せと宣ふ
ふ女中ふて。ふ仏とゞく。ふでおくふくまゐりし。時宗朝臣ハ秋布ふえらみて標致
さへ世ふ比なく。のひびき風流ふ遠ふ漁川采女
ほとゝ賞美めつく。近くめしは卿の返事仮名ふはをゝえのへ父の
ふ仏ふ郎はいふもさふなり秋布ハ面目ふおもりてぞえたりける。ふのごく

執権の氣色よ悦ふえをえく。南殿ゆく欲びのひ。時宗朝臣ふ宣ふやう。相州より
贈られたる。ふもがふ詠人あれど。志しまふくと宣へ。時宗朝臣ふ遠ふ漁川采女
ふ指ふく。件のふへ。彼壮佼が詠るふやふ。渠ハ漁川采女吉次と
いふのなれ。稚ふ時ふ父母を喪ふとい
の諸名家ふも。をふく恥ぢとほ。秋布といひ吉次といひ時宗執政の世ふ高く。
かゝれ秀才の出れる。太平の祥ふことと宣へ。南殿ふ答ふやうと悪く。これ
祝ひ博多詠ふ郎を近く召て宣ひけれ。良馬ハ伯楽ふ遇ふ。佳人才子ふ
因ぐに。扨ふく吉次とハ。年庚もよく夫婦ふよびや。こハ公ぐらていふのふ
めふれど。親のこゝろふあるべきなりと。
をふり。今又ちぐめて面なあいして送ふ捐がれぬひめれふ。南殿かく宣ふれ
ど忽地面赧ふになりね。そのとゝふ郎ハ。南殿ふまふ仁ふ。僕子といふ者

和歌の贈答
瀬川秋布
執權家に
賞美
北條時むねあそん
母公みなこどの

せ川うねめ
はくこふ四ふ
めこしく

そ。只この秋布のこゝろはあれど女子なれば家を嗣せべくもあらぜ。吉次が父母は。徳行のはえあつて。終られ家が奥し。その子又文武の才子なるに。かれ仰がけまゐりて。いかでか黙止ゐるべき。されど秋布は。ゆゑ十五歳にてゆへ。その期なほ少しをやし。今一歩年が孫ゆゑ。かならぶ皆縁をとり締ゆゑとやゝ。南殿は吉次をも近く呼ばれ。秋布とともに酌をとらし。ゆゑて相州に盃が勸まひけり。かくて時宗朝臣は。初更の比及に席を辞し。博多瀬川が招て退出まへ。秋布も暇をまゐりて宿所へぞゆりけれ。

第三

恥をしらぶして。大に辱せられたり

五指のかなくに弾んより。一拳にしかぶ。瀬川采女博多秋布が。和漢の才に長られを。執権出母子。一ちゝび賞笑ありしより。その名忽地ゑくゆえて。近国はでもかくれなく。その詩歌が需るもの。門前に市をなしたり。しかれどもこれ瀬川采女を毎日の出仕に暇なしとて。その需に應ぜず。秋布は推辞に據なくて。十ちゝに一度は脱れ得ぞ。筆とれるもあらりけり。とゝに又北條家の内管領長崎平九郎尉頼綱が甥に嵐川嘉二郎武行といふものありけり。その身執権の近習に召使るゝといへども。ゑよからぬものなれば。伯父粧綱これがこれかだり。内々笑絶しくよせはけど。時宗朝臣も。彼が便佞なれをしりまへば。折をりて遠ざけんとおぼせとも。なほ不便を加えて。形のごとく召はかれけり。件の加二ゝは。公ざはのよからぬのこゝろにぶ。稚に附に友とちと雙陸の目が弄ひ。爬あふて樓より落けれが。過ぐ左の足を折れ。右の眼が突潰しられにぞ。遂に一目蹇の醜郎とおりぬ。しかれども。その醜にしは羞ぞ。猶さらに色好なる男にてありしかば。秋布が戈色の比なれを傳ゆて。ゑね意にあくがれ。あれ日腹心の草鞋奴荒石勘八といふもの。只一人が倡して。博多瀬川郎が宿所に至り。

明白に名告りて。齎したる扇をとり出し。これに秋布が詩書を需けれ。此日主人
泳四郎は出仕したく家にあらず。若黨養七とり次して。かくと告れに。秋布はよく
よく見て養七にいふ事。鼠川は内管領長濱氏の甥なるは。豫て見ぬ。彼人
こづらに来たりて。これが墨跡を需めるに。推辞んは無礼なり。そのことよしく
いひにしらべて。しばしはさせよ。こゝが才今四五枚の短冊を出をとりて。その扇をも
まぐしといふに。養七はこゝ泳四果て。嘉二郎を客房に請じ。こゝにしくはおはすべし
が。次第によりて写めゆへば。且くおん待あれぎしといひて。次の間へ退れけれがはて
どもはてども音もせず。嘉二郎廉忽の壮佼なれば。大に倦て座に堪ず。或は
蒸襖に立よりて画を瞻め。或は細代天井の目を算。彼此を徘徊して。ゆるぎも
廊下伝ひに。秋布が居室の間とりに到る。とこれは紙障の細かるに。しかれ
これあり。この処とて。彼少女が居室なるゝめと精して。短を片足を翹。只隻なる

眼を斜にして闕窺れば。秋布は餘念もなく机にかゝりて。筆をかゝるゝ形容。待霄
に蜘蛛を詠じたる衣通姫。月の前に源氏を作り出せ。紫式部なりとも。これに
ゆゑどこれ極に。これにもあらで足のすゝむを見えず。秋布は。人のけはひ。そをもれ
じ。声をもせず。竊にその人をうかゝれに。眼は一ツにて片足は蹇なり。これなん鼠川
嘉二郎なるべしとは。衣服の致などにて推量られしかば。心の中にそのなめげなる
を憤。驚かさずやとせひて。咳こるして。立んとすれおもらを見えせければ。嘉二郎
そ周章つゝ。舊の処へ立かへり。養七を呼出して。あまりに待てびたり。扇をいかゞ
あれせらんといふに。養七はいぶせくせひて。ぬるゝび秋布がほとりに行て。如此こと
なりといふ。秋布は嘉二郎が無礼なれを憎しとせひて。それとはなしに。件の扇を書
しられ。

東路乃多度迺瑞籬名嘗儞豆愛添詩神乃行惱鴨

と。万葉假字にて草書にてとひしけるを。義七客房にそ
ひて。加二郎にその扇にうつ〳〵と書果てとひしけるを。能書のけしき
にながめ。称美落涙するのごとくおもへれば。万葉仮名草書にかゝれたるものゆゑ
か讀くだしたる仮名人の筆の迹なれば。御教書よりを珍重し
て。義七に厚く敬ひ。扇を懐中して。勤仕をわすれず。主のご宿所おゆりね志ていとう
加二郎に。毎日に件の扇仮寿貴ごれよりハ帯ごれおハ秋布ご方ようり贈呈し
たりと。詫ごて。自湾ごれ傍若無人ゆりもて加二郎ご隔なき友おハ長城野
兵太敦宗とぼるごなり。原是京家の侍ゆて。将軍惟康親王の雑色ゆる
が生学問ごのなれが件の扇とうて吟咲ひ。嵐川氏へおどてかゝ忌しなの
仮紙毛ごふおごと同ふ。嘉二郎も又同くごとも莫て笑人ごゑゝくごれおハ贈
呈しの仮忌しとおりてわごん。それく世の女子に慕ごる。

是非の及ばれ所なりとて。真のめうがお回答そうに
ぞ。兵太いよ〳〵冷咲て。足下にかごとの歌仮仰のとう讀ひごれと同べき嘉二郎忽地
疑念發て。ごも〳〵詩やごん。ごれ實に一字も仰讀ぞ。縦ごくは解ごしごも
ゆゑいふ兵太ぜて。ごれがごそ欺れるごり。はごごのごく紙をヤス色し。東路乃多度
迺瑞籬名嘗你立ごは多度の乗給ようり乾の方。二里許ふゆりて多度大
神宮たゝぜるのふみふ兵神。天津比古禰命并ふその四子。天目一箇命世俗一目連
ごれが足下う眼の隻ゆるに比て笑ごも。又愛游詩神乃行悩鴨ごふ愛游詩そ
援州西宮大神宮も。ご年ゆ間足の立ざりし神なれば。ご又足下の尾脚短ふ譬
て笑ごなり。ごれを人の速ふ讀ひごれ申うに。萬葉假名りて草書にそ
ぜーがが熟く欺れるごり。ゑゝ笑止申るとて。ご審ふ解示ぜが。嘉二郎勃然として。
怒氣心ひふ發り。件の扇仮掻取ごゑゝくごゑゝとごんと引裂捨。只佳又ごゆ暗を

嘉二郎を
怒らして
兵太秋布が
和歌を解
ちりぐかん八

ねぎ川加二ふ
おさんの兵太

睜ㇷ。皓歯を切ㇷつらぬき。彼畜生何の恨もなきふを辱しめかくの如
いふ㆒てこの恥を雪んとていふなりと高く罵る㆒兵太怠ふ押さへて声を低
件の小牝些の文才ありとも。これを謀ㇷんとは。おのに秋布虚名を
負して俗子㆒欺くのこゝろぞ。これを㆒言㆒詰問ㇷ㆒ば。這奴ふ
恥辱㆒耐ず。足下のゆふ寛㆒復さんる。兵太が肚裏にあり且く怒ㇷ忍びよ
うんどころの端近くて。閑談㆒よそほひ奥ほりなる処へはひり。謀を
漂ㇷんとは。信だらていふ。あ二郎こゝろを㆒て。少し氣毒㆒紛ひ。聽て兵太㆒
閑室に誘ひ。劫ふをいそしんで。酒殽を安排に。透ふ盃㆒ふるひつゝ。露話を数刻ふ
及びけり。抑長城野兵太敦宗ふ些の文才あれども。元某曲子なれば博覧ぬうく
考れとこふようせそ。こゝろそのオ㆒放㆒て。人の短㆒を説。おのれ長なりと誇る。
嗚呼の白物なれば。常に人㆒直下して。これふはとりのをしとおりくされば同氣
相求め。同病相憐み。泉川嘉二郎と親く交参て。不良の行ひをかりけるを強
ふ嘉二郎㆒次の日出仕ㇷく。君辺ふ人ふ折を伺ひ。時宗朝臣にゆゝかう。実
やうん博多ふ郎ㇷ㆒郎ㇷ女児秋布ふ人のえらばれ古れる㆒㆒窃こ。或ふ引ㇷ
ろじて。虚名㆒高うせんと謀じりのも。さもようく。泳生ㇷ㆒ふなども古風あり
近侍のりて。格調定ㇷなくび。況和漢の古実など㆒。ものかりもよそへいろねと。
つゞ君㆒母子ぬく賞翫ㇷものふる。傷痛ㇷとて。密に眉㆒ㇷ算ㇷのゝひと誡し
ゆうにやけれ。相州㆒て微笑ふひ。昔小式部の内侍ㇷ年十二三のこふ㆒よふ㆒
ども㆒泳ㇷかゞ。人これを疑ㇷく。母の和泉式部ふよふ㆒ㇷなくんといふじゃ。ゝ
かゝはいと朽ちく号ひふこ㆒ぬるとそれ彼小式部ふ定頼卿ふ。大江山の名句㆒
泳ㇷつけたる㆒て。人じめて疑念㆒散ぜりとぞ。今亦秋布㆒議ㇷのもその
類ふくん歟。これにとゝふりのく讒なくんこれ日ふ彼ふ清奇㆒ふるふふそ

才。古人の糟粕が嘗ものにあらぬ。殊に粽の返事などは。當意即妙といふべし。
何ものかかれるをはらはぞと問ひ。嘉二郎畏て。その人は雄えあげがたし。
論より證據とやうるものゆへ。判者が立られ。和漢の文才あるものに仰て。秋布
と問答さし。これを試こまるゞ。るあのばから分明にいへんと。信じげにやせしが。
相州かさして。秋布と問答させんものは。何人かしられべからんと宣ふに。嘉二郎答
て。惟康親王の雜色。長城野兵太は。和漢の才あり。このものやしられべからんとやう。
そのとき時宗朝臣とて。これ嘉二郎にが秋布がねたくおもひ。兵太と謀しあはし
てかくはいふもと精しもひ。憎さもにくしとおぼせしかば。うち点ぬて。兵太かるまれ
よくしりね。実は此ものよ殆しかりけん。時宗思ひ悞て。彼女子が賞賜。虚名が
高うせしなんどう。世の人に誹謗せられることを安からねければ近ぬに。かまらぬ彼が
才学が試こそ。こゝが悞をしれべきもと宣ひしが。次の日情多倍太郎を以て。縁由が

母公に雄えまゐに。南殿にて。嘉二郎がはらはとこれ。大人しからぬ。うち腹にて
もひこゝぐから判者となつて。勝劣が批判せられし。但漢土の故実に干ては。別に判
者が立られぞれかと回答もひにけれは時宗朝臣。さまゝら建長寺の大覺
禪師に。しかぐのよしが仰はかはれ。和の故実は南殿こゝぐから判者となりまゐ
ぞし。漢の故るに干ては。禪師批判せられぞしとなりけて問答の日を定られ。
俄頃に博多弥四郎と長城野兵太が召て。件の仰るまゐり。弥四郎に某の日。
某の時に。女児が招て建長寺へこゝあれよ。彼寺に干て。秋布が才学の程試こ
つべきもと雄えまひね。るものゐ体既に晴がはしくぞなりにけれ

松浦佐用媛石魂録前上巻終

松浦佐用媛石魂録前編中巻

第四、詩歌に咏じて處女舌戦を

東都 曲亭馬琴編次

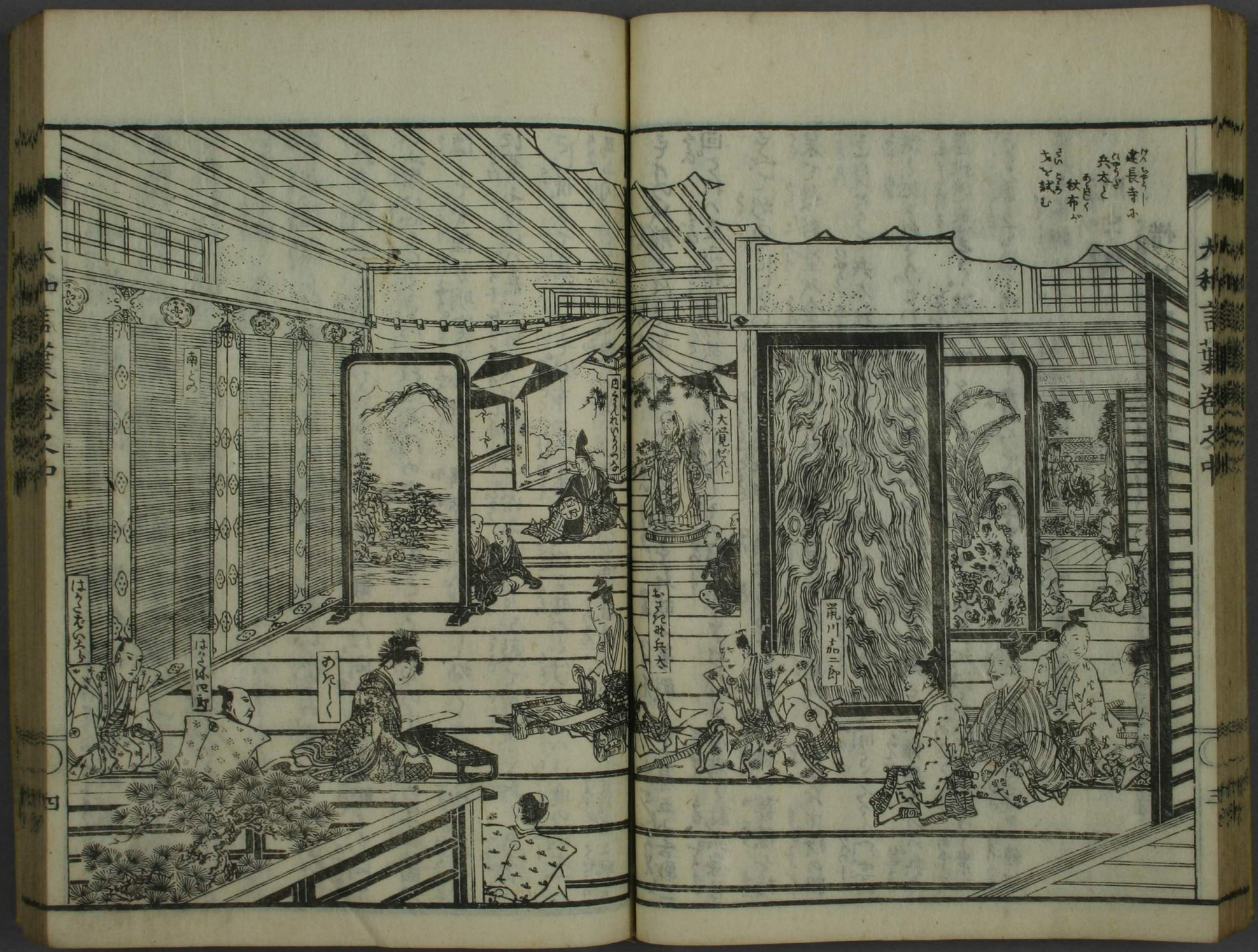
博多弥四郎素延ハ。さひもかけど。鬮の仰を禀て。心の中安からねバ。いそぎて宿所に立かへり。秋布に執権の仰をつたへしかバ。父荒川長城野ぬしに。怨を締びしけうれしく。彼ホ今大人氣なくも事を好みて。かゝる孫ハ申シ行ふなる故こそめふると呟ども。秋布はいどし尋思しつ。このうち宴に故なれバ。なうふど。曩ふ嘉二郎がゆづられつく。和歌は需なれよれ。あまりに無礼なりしらば。それに究つけて。箇様とこの歌はよみてとらせたり。是はや含みて。さればシ行ふなりん。この外ふべくえそおもひよまれなみも侍ふべしといふ。弥四郎聞てやうやく暁得これありく。嘉二ふは元来無学の俗人なれども。兵太を頗る学ありとおぼし。言われふ彼ホ。交は厚くしるゆ。

兄弟のうしなひたるせばかるゝびんしんひとつはしてかんざしを恥ざんとすれども
はんざしよりなほてごぞんなきそ。この禍が惹出ものにて。頻ふ眉根なよせわびり。
にれど秋布は。驚ざれ氣なかり。父上聞くうひそ。くちくちすご兵太
とゝふんをきりけゞねど。嘉二郎と親く交ゝ私のうのかゝば。その友ふてそ。ゑの
底の海をはさも。推てもられけるぞしよ」やつご男。彼人ふ及ざても。女子のう
なれば父の恥ゝめゝび。彼ゝつゝふ員たんあ。世の胡慮ふけりうん。機ふ臨ゝ
ん。変ふ應じ縦全く勝ざとも。全く負ざうはもひけゝびとゝあ。強て郎ハ
ゑゝとおもんど。かゝて已ざんふめゝびれんび。
三年。十月十五日。北條相摸守時宗朝臣今日建長寺に于て。長城野兵太敦綜
と。博多弥四郎が女児秋布が才学の徴ざ試ゝんとて。豫てその用意あり。判者へ
執権の母公南殿。并に彼寺の開祖大覚禪師と定ゝれ。客殿の西ふ女房とし
翠簾ふ懸ゝて。こゝに南殿の茵ふ備。東ふ男房として。慢幕ふひさゝしこゝ
ゝに禪師の倚子と置。一山の法師ぐゝ。抑巨福山建長寺ハいわる建長五年。十一月廿五日。前勤役時頼朝臣これふ建立し
大覚禪師ふ開祖とゝ禪師諱ハ道隆。元是異朝　宋國の人ほして。後嵯峨院
の寛元四年に来朝せり。すわち達磨二十五世の法孫ほして。道徳世ふ比ひ。
齢八十にのぞれども。婬として童顔あり。その聖僧。禪機の要道ふ明るのひろ
ゝび。博覧ほして詩文よほし。こゝふ於て時宗朝臣強て今日の判者ふ宛ゝ
なり。かゝて南殿ハ已の比及ふ。博多弥四郎ト郎が従者倍太郎素久以下。殿の女
房たち引ゐて建長寺に入来あり。知客の老僧これふ迎ゝ。客殿の次の間と。
轎ふ舁入さゝれば。南殿こゝより轎ふ出ゝ設の席に著のひ倍従の女房
と。主の後方ふ居並びゝり。そのとゝ大覚禪師は。二人の従者をわゝて。南殿

ホ對面し。つゐて男房の上吐ホ忘るゝへ。時宗朝臣の名代ゝして。内管領
長崎平左衛門尉頼綱大紋の紬かたぎぬして禅師の次ゝゐし。申次の雑ゝへ
二行ホつゐて末坐ホあり。又佐ゐの武士六七騎。馬ゝ山門のほとりに立ゝるの
為体ゝ。主君に告ゐうさんとて。袴のそゝ高ゝとり。今ゝゝと待居ゐり。ち
程ホ書記の僧。磬ゝ鳴ゐしとて三拝ホ及ゝ。嵐川嘉二郎ゝ。長城野兵太ゝ
ゐて東のそとより入り。博多弥ゝゐは。秋布を引ゝ。西のかとより入り。おの
南殿ゝ拝ゝゐり。又禅師ゝ拝して對座せば。雑ゝ二人料帋硯ゝとりて。
その程ゐに居ゝゐゝ。長崎平左衛門頼綱。兵太。秋布ホに對ひて。執権の仰を伝
へ法令五ヶ條ゝ讀めげり。その畧ホ筆ゝ。第二喧嘩ゝとゞ
ど。第三貝ゝ負の輩助言ゝとゞかゝゞ。第四。筆戦三回所謂詩。和歌。連歌をゐり。
そのゐとり執権ゝ母子より題ゝゐり。その〳〵にとれゝ風ゐて。連ホ筆を下
その ゝ勝ゝゐ。是筆なりてその才ゝ戦ゐ故ホ筆戦ゝゐ第五ホ舌戦二
回。これハ互ホ和漢の故實ゝ問答し。その方を戦ゐて舌戦ゝ称ホ條目
そべて彩のごしとゐふ。その景迹。江湖の場に異ゐゝび。頼綱ハ件の箇條を讀
果て後。彩塗ゝ金あてゝみゝれ。ゝ箱ゝ開ゐて。詩の題ゝゐり出ゐゝ。申次の雑
ゝ受ゐとりて兵太秋布にゐちゐれハ両人等しく押戴ゐて開ゐゝ。門字の
謎と記ゝれゐり。これ門の字ゝ明白ホいゐゝゞして。謎ゐて賊ゐゝれ難題ゐれハ兵太
忽地迷惑ゐゝ。沈吟ホ久ゝとしゝゐ。秋布ハゆゝ案入
ゐる氣ゐもゐゝ。ちゝゝと書つけてゝ出ゐゝ。雑ゐゐり次て。頼綱ホ遍ゝび。頼綱
これを禅師に呈ゝ。禅師ゝゐゐり高ゝに吟じゐホその詩ゝ。

門字謎

惜花間紅日西墜
閉朱戸不見多才


建長寺ハ
兵太と
秋布ハ
弋を試む
大覚ゼイド
荒川加二郎
南どの
めたーく

倚闌干東邊隱々

問無心懶傍粧臺

禅師判して云花間と惜む紅日の西に墜こと。間といふを字眼とす。間ゆく字の日を墜とゝいへれ門の字もり。朱戸双閉て多才をうとゝいへれ閉といふを字眼とす。閉といふ字のオなり。これ又門の字となれり。闌干ゟ倚べき東邊隱隱とは。闌干の闌双字眼とす。闌といふ字の東かくれ行。これも又門となれり。閨て心なれども。粧臺ゟ傍と懶といふを字眼とす。閨といふ字に心うるとゝいへれ。これも又門の字なり。初のごく四句の中に門の字四箇双隱して。義理分明実ゟ妙也と稱賛すべきものく。ぬく感じて已まず。兵太既に員ありければ。嘉二郎頓ゟ焦燥て。潜ゟその背を敲て催促ゝれども。兵太ハ只さし俛ゝて意もせず。秋布第一番の詩作ゟ勝ぬと讃えしべ。注進の武士一人。馬ゟ冈ゝて〻ゝら騎て。鞭を鳴し足掻双ゝめ。動揺の舘を斥て。蒼直ゟ馳去けり。さて今度ハ和哥なれば南殿より歌の題双出しのひゝれが一字題二字既あはめぐりて。紀州の郡七ッ双歌の中ゟよみ入れゝ。これいかゞなれ夏秋布が。和ぶの浦ゟいくよねぬでも紀の國やと詠ゝし。秀逸双ぞはして。今この難を出しゟふなれば。紀州の七郡ハ伊都郡。那賀郡。名草郡。海部郡。在田郡。牟婁郡これなり。これ双三十一字にとゝめ入れんゟ。容易ゟめぐれば。兵太ゟ頃の思按ゟ及ぐ。公くゝしくゝえゝとおぼしくて。憂揚のしなゞすゝゟ。嘉二郎ハくゝ促せども。兵太ハ遂ゟ旅向をゟぐ。秋布ゟぐて書ゝりて。短冊双さしおけば。博多倍太郎ゆ双らくゝて。これ双南殿ゟ進ゝすゝを。文臺ゟ受乗して讀あげゟふその歌ゟ。

伊都　那賀　名草　海部　在田　牟婁

いとゝみが夜ハうぐさほどめもりめりとへどひとゝんむゟふ住吉や

三十一文字ふ七ッの郡をよみ入れゝ。この公明なれハ南殿ハしゟもさゝわ。

人みな舌を吐て感吟し。注進の武士にかくと告て件の詠草が遍与せしかば。一人馬にうち乗て。花が如くに走らしね。されば極に長城野兵太ハ。歌合にも負されば。とて泣いよく燃るがごとく。嘉二郎ハいと本意なきに。恨しげに長城野がうらみ出りて。しばし嘆息しけれ。かくて第三番に及びて。筆戦ハ見限り。今度ハ連歌にてありしかば。長崎頼綱席をすゝめて

目がれせぬ夜が誰があれの月

といひかけたり。時に秋布声に應じて。

花にくれ日もあるものがそれといへば

とはけたり。亦これ當意即妙にて。目がれせぬ夜ハ飽もせぬが誰があれの月といひそめたれ。といふをうけて花くれりもれ日もあれに。それといふがごとしとつけて。春に晴るゝがかけていへり。申次の雑色この連歌が書つけて。騎馬の武士に遍与しければ。第三番の注進馬に指いれ。宙が飛して馳て行。ここにいそ川に長城野兵太ハ。三度の筆戦に負しかば。頼綱いと苦ゝしれ氣をつかく。嘉二郎兵太がうへうへ。おのく。那事が好きて。はなれ條がなえあげ。いひがひをなく。三五の未通女に旅伏せられ。巧拙を且く閣て一首半句もはらめるに及ぶ。以の外なれ越度にこそと恥しられば。兵太潜に冷咲て。文人才子に遅吟あり。又早吟あり。左思が三都の賦ハ。十年の苦心が積て。はじめて成就し。禰衡が鸚鵡の賦ハ。草稿が更ぎして。即座に章をなせり。しかれどもいぼしを勝り。いづれを劣とされとせど。某元来王粲が宿構の譏を恥れ故に。卒尓に筆を下さず。こゝがりて遅吟なり。もし舌戦して一問答せば。たゝえて口が開かせぬじといふに。嘉二郎そなほ陷ミ難がら。はりともとゝひかして。其顔色がなほしけり。頼綱ゆゑて。さらば問答あるべしとて。舊の席に帰り著ば。執筆二人左右にすゝれて。この問答を記

さんと用意そおもあそ。嘉土町へこゝ汲の中に。めぐみふれ神を祈念もつ。兵太こと一
世の浮沈てにありとそひしかべき代頭して秋布ふ對ひ唐山の経書史伝のと
むづしけもこべ女子の頭うくれるものひ脱ぬうのうのようく
いと沸た所が問ぶし。今日内官領代りて。勲位の名代にしまふとゆめこの名
代どしふるのは。古語う俗語う。いづれの時ふいひ出せれ。若のくと詰問ふ。秋布微笑
て。こへ今の俗語ふあふべいとぬくくようにふとえくく。古事記仁徳天皇の紀
ふ大后石之日賣命の御名代として。葛城部を定む。太子伊耶本和氣命
の御名代として。壬生部を定む。水歯別命の御名代として。蝮部と定む大日
下王の御名代として。大日下部を定む。若日下王の御名代として。若日下部
定むと。かれこれ名代といふのみ。仁徳天皇の御はより已前に。のひとて
ふれくわり。と答れば。兵太ハ忽地ふ困に。蔑くくそおりひくれ。秋布かくて。
うも又似たりして。沸たとふ死日はいくもぐ。彼首の屏風に。小鳥駭
恵とたり。もうれふるにめの字ふそえくく稱れのいさくめ。ひくくめ。
山うくめ。四十かくめなんどなり。十ぶめとつあさ。今もめ□
かくくめ。山がくめハめ。省なくく稱けり。此めの字れ氏泥そ。いう彩るふて行こと
同ふ兵太こそ眼ふ睹ふ。ほ氏同ふ芥んとすれふ。いふ所をもつぶ数回咳して。やう
にいふやう。物ふ名ばくれる。悪くく故めるにめぶこれらハめりに沸そるわれど。
いまこと考さりといくハ。秋布うち晒さ。いふこの人かうぶ物に名ばくれるやふ
あり。名ぶくかぶばれる行旦さといふれ。てハすめ。つぐくくめの氏理を忘
らでやおふさふれ。といふやもめくぐ。兵太大に赤らて。これ実に沸そうれくる
公氏用ひぐそ。その故あふハ解多くいて生くぐ。といれはけハ秋布がいふやう。千ぐ死。
はぐくくめひくめおんどは。群くそぶ小るなれをりてめの字をそえて呼び

ゑび［　］それの約めとなれば故なり。にれば、すゞめ
と名ぐ。つゞくゝゝめは、七伏食ひて。兄も群れるなれば、ぢゞゝゝめ中稱ふ。
つゞくゝゝの略稱ぢ。それをるは略しても。つゞめとも稱ふり。ひゞゝゝめ山がら
めが推てもりあまくしといふ。兵太ゝそれ魂が逞して小勝がそゝめ。
ゝそれおそもめれべし。ちゝゝばうゞびそ。ほゝゝだそゞをかゝとなんどは。
その字をそえて呼ぶり。又虫おそりゞゝ
秋布蒼て。件のるゞもは。巣がくふるの実がなれば。その字をそえ
て呼びぬり。うゞひそ。愛食巣ふて。うれしく巣が食ふの謂なり。又ゝと
ゞそゞのそ［　］子ま〳〵稱兄の謂ぢ。彼が鳴声のほゝゝとゞまれがほゝゝゞそ
とふ兄はゝゝゝなゝとのる［　］を畏せり。かゝそゝらゝゝと鳴ゝりて名づけ。
そゝけんゝと鳴ゞりて名ぐ。かゝ［　］ことゝ通ひて。ゝといふもけといふと。その

ゝ絵のお虎。又ゝうゞゝそ。草をふにそゝ虫なれば。その字なそゝそ欲。
裏をそゞゝと訓て。［　］を約ぢ。［　］ごゝゝ。雲ゞうも兼女うれ。兵太いふ
ゞもその才敵ゝがこけれ。これふゝ負てけり。かゝて勢筆二人。この問答を
書留め。騎馬の武士ぬりて。時宗朝ほふ注進ゝ。舌戦二回ゝにの果り
けるゝ。博ヨタ法師郎ハ。やうやくに安堵て。いと欲ゞげみえそこれ。茄二郎ハ
妬くゞひて煩のあうり。ゐとり憤ぢれとゝくも。終ゝそのかひ
なし。かゝて南殿そ。秋布を近ゝ召て。今日のる。ゐゞしよりハ抜群ぬり。世よ比
なゝて才女うる。相州もゆるぢ。にとそ感ゞおぼしそぢしとて。只顧褒賞ゐ、
ば。禅師頼綱。倍太郎以下の輩も又これ。裏ゝ已ゞ。只嵐川と長城野
のゝ。いそ胡慮ゝぞなりにけれ。ゝ紅ふ南殿そ。大覚禅師ふ別ゞ告。

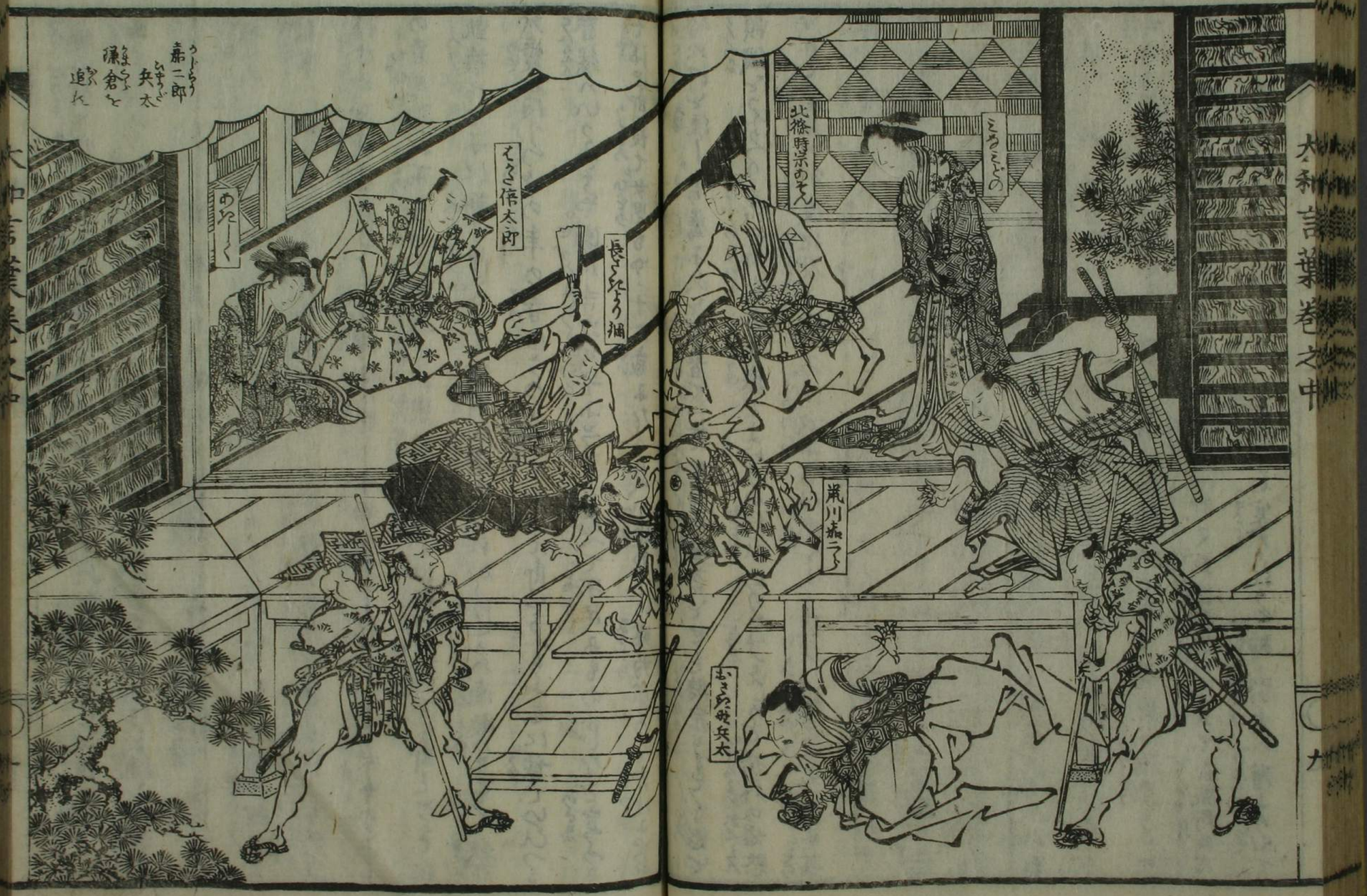
秋布とおそくなりうへ博多倍太郎。同ふに郎以下。夥の女房先方後方よ隊
ちごひて轎よ乗し」ほかく〳〵せ平左衛門尉頼綱ハ此引取りて。兵太赤二郎ホ
仗ひつ。執權の舘へぞそふりける。

第五

才ホ猖ご讒奸罪せごれ

この日時宗朝臣は。近臣おが注進ふようつ。秋布兵太が勝敗をよくもり
ておわせつ。申下刻ふ及ぐ。南殿そ秋布ホ仗おて建長寺よりなも。
直ふ時宗朝臣に對面めつく。その日の名体をおちもおく〳〵物がくりの〳〵相州大ふ
感悦めつて。頃日の鬱胸をやくもたねと宣しちり。浩処ふ長崎平九清つ尉頼綱が
舅川嘉二郎長城野兵太仗俱してほりまつ。秋布ご泳草を足上そ。
そのとき時宗朝臣いかに二郎兵太仗ちじふくこの愚物何の面目めつてぬる
びれふ見ぢそ。いふやめ〳〵いくせん。件の二人そ皆に高く責りく。

冷た汗を流し。席塵ホ仗を搦著て。一言半句も回答とせざ時宗ふとく〳〵怒て
頼綱をえくり。嘉二郎兵太そ。豫てよかくね行ひめりと仗ふえしうど。格好の嬉懲
仗のそ。是非の御度に及ざり」ホ。這奴ホの居已をきく〳〵仗才を猖て上を蔑そ其
罪いと重かく〳〵や。今ハ許がにとく〳〵追拂ひ。と仰もめぬふ。牧綱法史
ようて。嘉二郎が乳髪仗くい櫛こ扇をりて丁そと打ちえつ。声仗ゆり立
てくりけ兵ハ汝が手本の悪行。それ教訓仗かこりしふ雲ぞうも用ひ
ざれハ已とと死ぬど内く義絶ととりくとも。勲よ叔姪の因こを脱ま。共ホ面目
仗喪へり。と」聊も恥をきり。その首を徒一の〳〵君恩の鴻なれをぬひちくバ。
水ふも沈こ火ふも焼ま。て。人ホてくれと罵り。天庭ふ両刀をりだ
とりて。掾より樸地と突おとせハ。博多弥に郎又執權の仰を禀て。長城野兵太
が大小の刀を捺とり。これをも庭へ突落ぬ。寔なれれ。檜山の火ハ。檜より出て。



嘉二郎
兵太
鎌倉を
追れ
あたーく
そうさ倍太郎
長さんより綱
こゑこどの
北條時宗のそん
嵐川嘉二ゝ
おきゑ助兵太

ひ逐ふ檜ぬ焼こふ。今この両人う奸計もて又ろうこれを慎よ。もとこぬ慎よ汝ようぞ出されりのへ汝ふ返れりのなり。と曽子のいへれぞ宜ろりける。にろ極よ奴隷ふ。答をとうて嘉二郎兵太ぬ催促し。日来憎しと名ぐる。臓脊のこふひきく。或へ打或そ罵了。只願ふ追くそ。庭門より走ふしたり。かくて時宗朝ほそ。秋布に砂金十両をろり。南殿よりふ小袖一襲を賜り。又建長寺へそ博多信太郎ぬ使者として。大覚禅師へ駁の謝物ぬ贈了たまふぞ。秋布へこの日の首尾弥れ而もろく。剰過分の恩賞ぬ賜了けれぬ父の泥足郎とそとに。軌権ふ母子に謝し申しおて御前と退出けれ。かくしくべ。南殿へまそく秋布ぬ愛むぼしう。次の年の春のころう。父の泥足郎をえまふ毎に豫てのひつる婚縁へいふぞや。瀬川吉次ぬ婚ふろりてへめくて不足ふもわふじなぐ宣つふぞ。泥足町最て。女児もや十六歳ふなりりくへ遠かくよび媒妁ぬりろく。吉次よへ

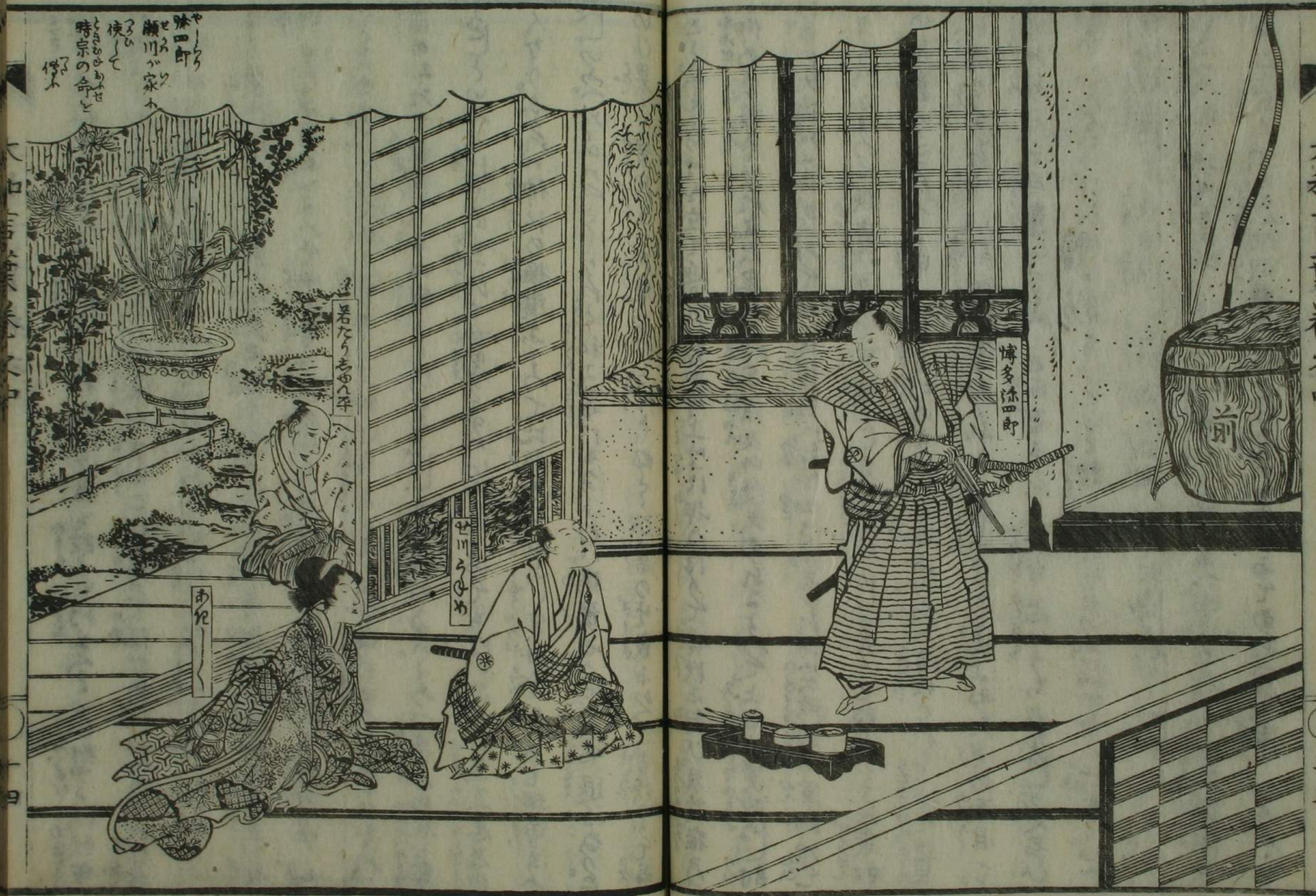
ろぐし。と應まりしぬ公務暇なくて。その年も。半へいさぼくてこしつやうやく秋の季ふ至り。親族なれべそく。博多倍太郎ぬ媒妁ふよのみて。瀬川采女吉次に婚縁のろ弥いへそよろ故なく整しかべ。そぼろ黄道吉日ぬえくみく。秋布ぬ瀬川ぬ宿所へ送り遣し。婚姻ととり締ね元彼秋布へ公ぐ侯の風流くれのころぼふ夫ふ斉眉て。操節貞しく。奴婢ぬ憐こ親族ふ睦こてよく内をおさめけれへ吉次奴くく訪びく。僧老の契いと深し。活処ふ九月中旬ふ至りて。京都の守護。北條治部大輔義宗（泰時の孫。政村の嫡男。この両大将京都六波羅ふありり。ゆゑに両六波羅と称ふ。動権時宗の親族）同左近大夫時国（時房の孫。実政の嫡男。この三男）より。鎌倉へ飛れ到りこ。その故を尋れへ。太宰府の守護平経高へ曩に謀叛のゆへえめて滅くりし北條時輔ぬ京都ふて洩しぐ。時輔退治のくれ軍功めりしによりて。甲公憐り。九ヶ国の成敗ぬ放ほして。国司の所領ぬ押奪ひ牛渕九郎清澄くふりのを軍師として。俄須ふ

謀叛が起せしかば。臼杵河野が徒これに与し。京謙倉が攻亡して。径高武家の執権
たらんと計較めり。これによりて。松浦景隆大友藏人。菊池原田なんど。径高と今
戦し。一時に雌雄を決せんとすれ処に。牛渕九郎清縄夥の軍船が造らし。肥前國
平戸嶋に押渡て。牛角の勢が張り。その機変極りなしとせまいそぎ討まとさし
向まれぞれ。ゆしは大るまれるぞし。と書たりけれ。時宗一覧めつて。俄頃に一族の大
小名門管領頼綱以下の諸人評定衆が召集合。両六波羅の連署を披露し
て宣ひけれは。往に時輔謀反のとれ。西國の逆徒忽地に亡しき。径高一人の功に
あらず。時宗が洛の敵を討しによれり。しかれを径高武勇に誇り。京謙倉を亡
しく。浮雲の富貴が極んといふとても。天いかでか許すべき。天慶の純友は威が九
州に振るといへども。身死して葬れに地なし。まいてや径高をや。今一員の大将が
ひし向まれ。一挙しく滅ぶべしと宣へば。みな諸ともに仰理に見えたとぞ應けれ。その

とれ時宗朝臣を。此中が佶と見廻して秋田城二郎実政がちかく招れ。今日より
足下がりて。鎮西の守護とすべし。いそぎ肥前國へ發向して。はづ牛渕を討ま
はへ牛渕ぶに亡まれば。径高を旭にむかふ霜の如けん。とくく出陣あれぞしといそ
がしき。かかて上総介に任ぜられ實政これが兼ぐ。諸國の軍勢が催促せ
ば。ゆゑ遠くに及ぶべきか。只実政がまま勢をすぐのこ。今夜由比が濱より私が
出しはなめ。願くは文学武器に長くれものが。一人属られて。実政が輔とまさ
しめまへしとはらはにぞ。時宗しばし尋思して。近臣瀬川采女吉次に。年なは
弱けれど。忠義抜群にして。智勇双なれものなれば。この男をおてゆれたまへ。
吉次には目今とまたよりいひしらしめべし。宣へば。實政斜ならば欲んぞ領
當し。忙しく宿所に立かへりて。老黨草野三郎ホに縁由が説しらし。今夜月
の出れ比及に。纜を解ぎしとて。これものもとりなぐ。西國出陣の用意しつ。

勢都合二百餘騎。由比が濱にて著到を記さし。八九艘の大船にとり乗て其日の暮れたるなれば。この実政は時宗朝臣の曾祖なりし。北條泰時の弟亀谷実泰の嫡男。稱名寺実時の二男にて。執権の氏族多かれ中に。これにて親し人なれば。時宗これを擇出して。法西の守護とし。それから上総介に任じて。経高追討の大将となしまへり。げに時宗の目鑑を違はず。實政只半日が間に軍装して。鎌倉を船出されるに。人の及がたきなりとて。親しきも疎きも嘆賞されはなりしとぞ。この日瀬川采女吉次は出仕せざれば。彼件のるを見たれば。秋布を娶りてより。七日に及び。稀なれ休暇なりければ。しばしむゆれ母におぼえ其日の夕ぐれに。夫婦端ちかう出て。咲いかれこれ庭の白菊を詠めたる。暮ゆく秋を惜む折しも。秋布父博多弥四郎。馬を門内に乗せて。瀬川が若黨村沢俊平に案内さし。連忙しく入事れを。あるじの夫婦こんかへりて。とれもひたけど

とく。やをら坐を立て迎ひば。弥四郎上坐に押なりて。吉次に對ひ。執権猛乃仰あり。謹ぞ笑れよ。太宰の経高謀反の笑えあれによりて。上総介実政ぬし。討手の大将をうけまつりて。今夜鎮西へ船を出さる。しかれに実政頻に軍師を乞まうしにまつて。便吉次をもて軍監とし。実政の輔としまつんとあり。いそぎ乗船の用意いこされべし。申伝れ旨形のごとしと述ぶければ。吉次これを兼て。近臣外様多かれ中に。弱輩の某かれ仰を稟ること。しよ那を身の面目も。時を移さず。用意いこさべしと回答されよ。秋布忽地うちしをれしが。又もひかへしけん。そかなげれ仰を稟まひていと鈍しくこそといふ。弥四郎は秋布が心の中を推量して。声を低し。吉次猛に西國へ赴くとも。これかくてあれなれば心のおよぶ程は。扶持さるべし。吉次も後母とくもひまへ。しかはあれこが女児。皆姻をなして。僅に七日。忽地別離に及ぶる。親の愚痴にてあれべきが。懐くおりふそ



やしらう
弥四郎
瀬川が家に
使して
時宗の命と
伝ふ
若たうしゆん平
あれ〜〜
博多弥四郎
前

理とうれど。又會がて別なくねバ只とて後を放て。行まくとひ劇ろに秋布
が胸ふさがりて。果敢くしくの恋ど。吉次これをみて。ほゞ町にいくりくれへ某
が実母玉鳴。甘浦二郎といつのの。松浦あありとはけしかど。三才のとれお別まて
より。骨肉の義。忘られ生死の程も定く知ふべ。今度彼地へ到りて。経高と征
伐せんの叙とりて。母と身が在処をも。尋べりおりひゆくバ。ちくれ国へゆく如
くふのふべ。こゝて公ふ勇あり。又村沢俊平ハこゝ後ご信ありなれりのなれバ。
留めおて秋布が身の護ともいさゝぶし。その餘のるハいろれ。ほでもゞ。足下ハ元忠孝の
ぶしとつゝに。ほゞ郎点ゞて女児ごるのハ
人なり。これが神仏の擁護ふよりて。比類なき功名。実母舎弟おも環會ふか
べしふべたるのくごなれど。私ふまれるくねバ猫豚ちごし。ごや退るりと。
いひ果く席な立が夫婦これを送く。ゆくび舊の仕數おかく吉次ゆゞて着

黨俊平なほびて留守のるを伝えおく。彼肯ごていふ。僕幼ようち先
君の庇ふ蒙れが恩のるは死ごし。く手ふおりひてゆに危窮存亡の秋に
當てか〳〵賞ふいと本意なしと吸バ。吉次かくみて彼ごつゝこゝ後ふ自己の志
ふ舒まいこ。主のるふせんに行と留おくごれバ。ごゞ後
安かゝゞ主ふおと思うとくれが思うとくんや。ほげてもひごほりゆくとそ。理をゞし
ていひ諭せバ。俊平ハカおよごで。ゆやくに巣汀ね。吉次又妻お整く。火急の
仰ふらりるれが。公いそがしくて。細ちうハ伝えおうごおりひ決せざれとも
あゝバ。俊平に相語て。多くれ判断ふほごしまく。いに秋布ふ涙ごみ
て。つゝゝバごるやゝ。ごばうも忌しやゝせのるやゝすでふ伝ゞねど一日く
肌寒し。遥ゞと和ふ答ふ寝。鉾と枕はしまふも。みごうふ愛して対と保ち。
逆臣ハ滅ちく。母ハ君ふも環會。凱陣ちうんるをのこ。ほゞしくりとそ。

名残をしともいへがえに。いはねはにちとが武夫の妻としてあるれなり。

第六

涙が含て節婦義男を送れ

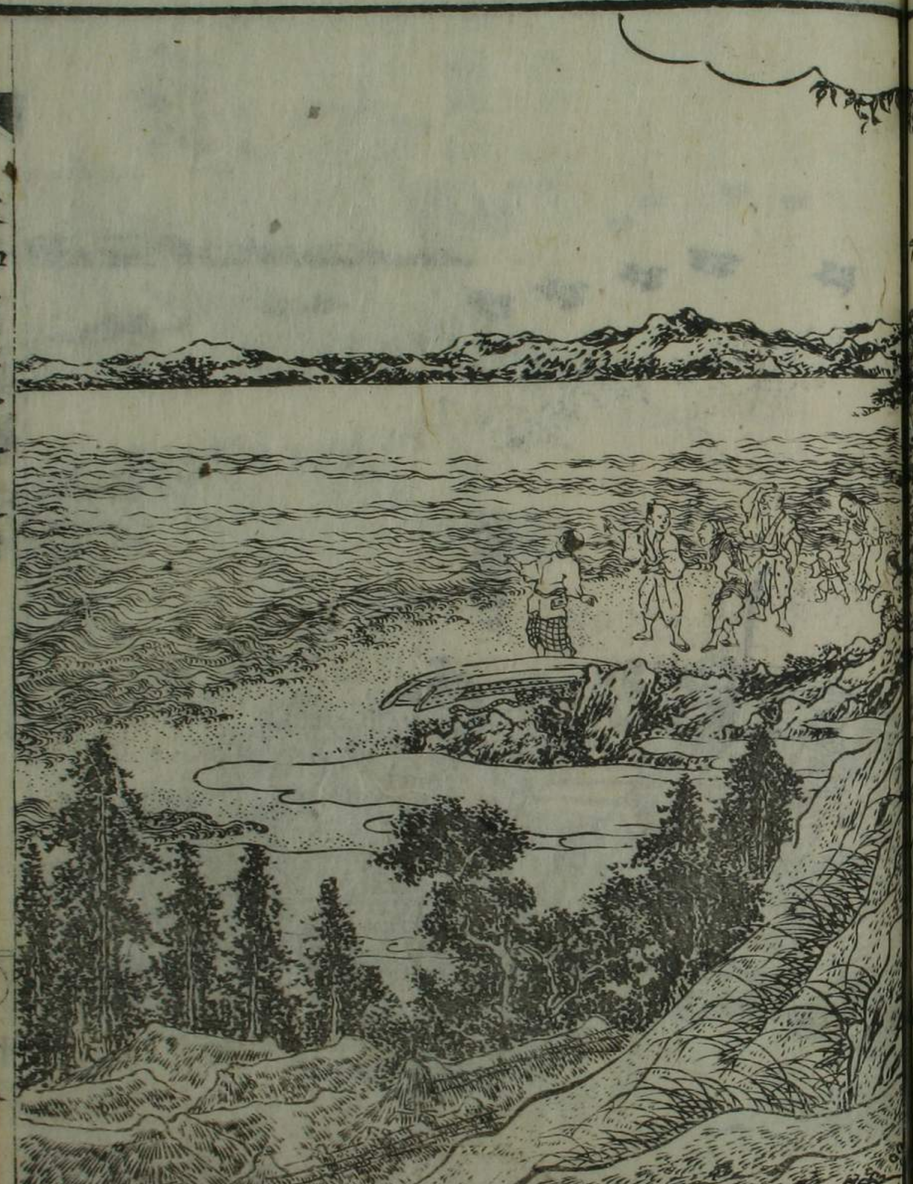
かゝりけれ処に雑兵一人喘々走り来つ。門内より呼ばれは。總州実政をいふ。今夜月とゝりに私を出して西國へ赴くなれんとて。目今由比が濱に軍兵を集合すべり。瀬川氏いと迯しとく乗りすべといひも果ず。舊の道へ走るれば吉次遙にこれを見て。さては実政今夜謀倉を出すなり。やは後見じとて。衝と立あがり。日来床に飾られ父が紀念の黒皮威鎧を取て投かくれば秋布はひぐしく。拿手撓けれ星兜が雄手の服よりさし出せ。吉次兜の緒を締まば。まこと秋布がさし出せ。太刀さへ長れ旅路やとて。ぞろぞろあるを妹と脊の別れの鐘は曉ならで。入相の声さすがなり。その隙に俊平が月毛の馬に鞍おれて掾べら近く牽出せ。徒もあらせず吉次が閑ると乗てる綱掻繰。秋布をるるにとゆふ

くれに入日と共に西の海れ出私にあるんと馳せれば。主に後見し馬飼戟持腹巻に小手臑當し跡に跟てぞ追たりけれ。秋布は今さらに。いふべきことをいひ果ず。ぐくづれるも。ぐざれば。いとゞ名残のをしまれて涙玉なるものみなりしがいひまして俊平にいふなり。亀谷の石切山は由比が濱が眼下にみれ直に彼処に赴れと。夫の私出しまふを外なからみまほしれに。住ひてよといそがせば。俊平ぞてげにそからげれ別をしるへは。いとゞ迷惑ぞおぼしぶれ。折しも月は甲夜より明し。いざまへと遮しかば。秋布ぞやく涙をおさめ。女の童一人をおして。俊平に御導けせ。石切山へ走りゆゝ。既に彼山の巓にもなりにけり。盛り返しにむら菊乃花の香はいと濃なりなれど。主従露が拂ひもあへず。由比が濱方をみるとせば。浦ふく風も九月の十三夜の月さやうにて。金波長く流れては玉兎の走るを速く。濤浪近くうち寄せては。鷓鴣の飛ぶこと稀なり。されば実政の軍紀

只今纜が解ねとゝえて三鱗の旗濱風に飜はし弓矢打物が飾立られ大
船八九艘掉の歌を唄ひはれ遙に岸を離るれがこれをゝんとて老弱男女彼
此の磯に集合たり石切山にハ秋布がゝんとこれ方ハ眼もたれに。とが夫ハ彼
船をこの船をとて指せどそれぞとはしるよしもなく。をし乗後をまつぞや。嗚呼
心のくはしとて。主従眉根が顰れ折しも裁許橋の東なれ延命寺の森の
蔭より。鎧られ武者一騎。忽然と走り出濱方へ馬が馳されて形容指物れ
ゝ鎧の威毛なんどこそ。定うにハゝんとゝ祢。天晴雄はしれ武者熊ハ。はがふ
べくもあらねこの人なり。秋布ハこれがゝえて。けてハ後れまひにれ。こハいかにせまじ
とて。主従手に汗掻りけゝ。ともしらぬ吉次は。主君に辞別がやさんとて。執
権の舘へこまりて。時宗朝臣に拝謁し。直に退出て馬を走らしつゝ。由比が濱に
まてゝゝれば。ゝひの外にる後れて。船ハ既に岸が離れ。大洋遙に漕ゆくに

ぞ。吉次吐嗟。とて後焦燥。とハ朽をしとゆふ汐に。馬をざふと乗入れて追ふ
んとぞ泅せられ。秋布主従はこの形勢に慌てく陥み。いかに勇くおはすれども。
暴虎馮河の悔あれべし。浪風あられ海上がいつまでか追まふ押流されやしまん。
今も沈こまふとて。これもあらでの後ともに。声が限りに呼び留れど。間遙に
遠けれぞ。とぶかねをげに理すなり。かれ時にハ神仏の冥助が仰にしくことなし。
と主従こゝ後が心とろにして。春日八幡住吉四社。鏡の神社も曇なれ。滅が
照らしまへとて。しばし丹精を凝しけゝ。又海つゝが眺予れハ。神や守らせたまひ
けん。吉次を。逆巻浪が物ともせず。騎人ハ達者。馬ハ逸物ゝ。人と馬と力を戮
て。艦近く乗つけたり。実政ハ嚮よりこの形勢をゝえて。大に陥ゝ。あれ吉次
が助よとて。船をゝへさせんと下知されに。軍兵夥うち乗ゝる大船を。速に漕
かへさべくもあらねば。鐵にもふにはしれど。看く可惜壮夫を。殺さことよ。

石切山ホ
秋布
良人
目送



実政の船

せ川らね女

咳れたるに。吉次宰して乗著しかば。ぬるく飲び。ゆがて人馬ともに。私に扶のほ
さし。信かに勤れば吉次は勢捨へ身の暇を申せ間に。そひの外後にたるよし
を述れば。実政ゆて。しからば其許の懈れたるあらば。目今の為体をうたれよ
盛綱が藤戸を渡せしに勝れり。船出はこの黄昏過ぎと定ふるに。潮と風この
便宜あれば。久しく待あるべきことを得ざりし。こゝをもてこゝ後の外に。大に其許
を労せしとて。他ゆゑなれば。ほかゆえけり。されば浦曲なりけれ見物の良残も。吉次
が大洋を渡せしを。稱ぞよめれて。おのが家路に立久しば。吉次が従卒あれ海を
渡すにはしるなれば。陸地より西國へ赴れ。秋布主従は石切山より吉次が船に
乗得ることを得ずして。ゆうやくに心おちゐられど。船は諒なく帰りゆくにぞ秋布
いとゞこゝ後ぼそくて。村沢俊平にいへりけれはものあはかなりけれ因縁あり。こゝが
月はこの石切山なれ望夫石のほとりにて生れ良人は又松浦なる。境の神社

の祈子なりとぞ。ほれがあや。今霄の景迹を唐山の望夫石。こゝが國の領中麾山
の俤に似て。こゝが悲しいはしへの松浦佐用媛にも勝れば。會者定離とは
いひながら。會ことかたく別るに易れはうれ世なりけるとて。声を惜まずよ
と泣が。俊平これを慰めて。さあくにいひにしらへやがて麓へくだりけれ。

第七

海濱に書を失ひ書を得たり

秋布は夫吉次が西國へ赴れてより。既に五六十日を経たれども。たえて一度も
音耗なく。冬もすや半ばるて。長き夜をかたいも寝られず。ほど後まね暁
に入る月をながめては鎮西のかたなつかしく。はくぐと孤燈に對ひては。こゝが影
ばかりで友も無く。只管に心ひはそりしかば。父の源四郎これを見て。いとゝ後のと
なくおぼえ。毎日に若黨関義七をつかして。その安否を問せけり。この義七を
秋布が初をとさより。守傅をたるものなれば。俊平よりは。こゝ後へ遠なく心あ

から。秋布は彼が来れ毎に。夫のるすのといひ出て。不覚に落涙しけれど。
簑七はその心中は推量す。かくほどにおもひくしまひて。不意のるすあらばいかに
せん。僕潜に父上に申えあげ。近れに西國へ赴くべし。消息なんどは。豫て写め
おれまつかしと。信ぐらして申ゆるにぞ。秋布斜なるに飲びて。そのまゝ彼地に赴れ
て。面あたりすが夫の安否を宮ぐ。これにまを心ゆりはあらじ。父の氣をよろし
れ折を窺ひ。ヤシにしらべてたべといふに。簑七はとゝ給ひ果て立かつり。その夕。
主君弥に郎に件のるすは告ふければ。弥に郎もけすがに恩愛のなかさなく。
あまりに女児がいひはそりて。長れ病気に臥りやすれとて。心安からざれ折
なれば。今簑七が西國へ行んといふを申て。竊に飲び私に戦場へ消息といこ
ゝ。すれしりては許がさし。ヤ汝がとゝ給ひとつにて行んと好ふ。それはしらべ
がほにてあらべし。と回答しかば。簑七畏て。その夜又瀬川が宿所に赴れ。秋布に

弥に郎がいひしことは申えしかし。かれば翌はほとめて旅ぐちゆべし。書簡など
写めおれまつ。目今遍与さまへといふに。秋布大に飲びて豫て便あらば嬉しん
とて。毎夜にまつゝ織たりし。錦一巻と。十尋にもあまれべくしんゆり。書簡一封
をとり出し。又にはからいかべきるすは。叮嚀にいひしかし。又一封の今と。一裹の丸
茶をとり出して。これは簑七に餞別し。そのまゝ今ゆれて。いつの程にかゝり来べし
と問ば。簑七しばし僂へて。今茲もなは四五十日はあれど。路遥なれば。年の内に
はそんつきなし。正月の上旬にはかならずゆりいべし。と回答をして。書簡と錦は受
とり。金と茶はまつりて。聽て宿所に走りかつり。俄頃に行装は整つ。八声の
鶏とりなきともに。西はさして立出ぬ。とゝに又嵐川嘉二郎武行。長城野兵太
敦宗は。去年の冬鎌倉は追放し。些の貯禄と命綱はて。伊豆の山中に躲
し住ミ。嘉二郎が奴隷勘八は。そりく潜ゆりに鎌倉へ遣して。事の為体を窺

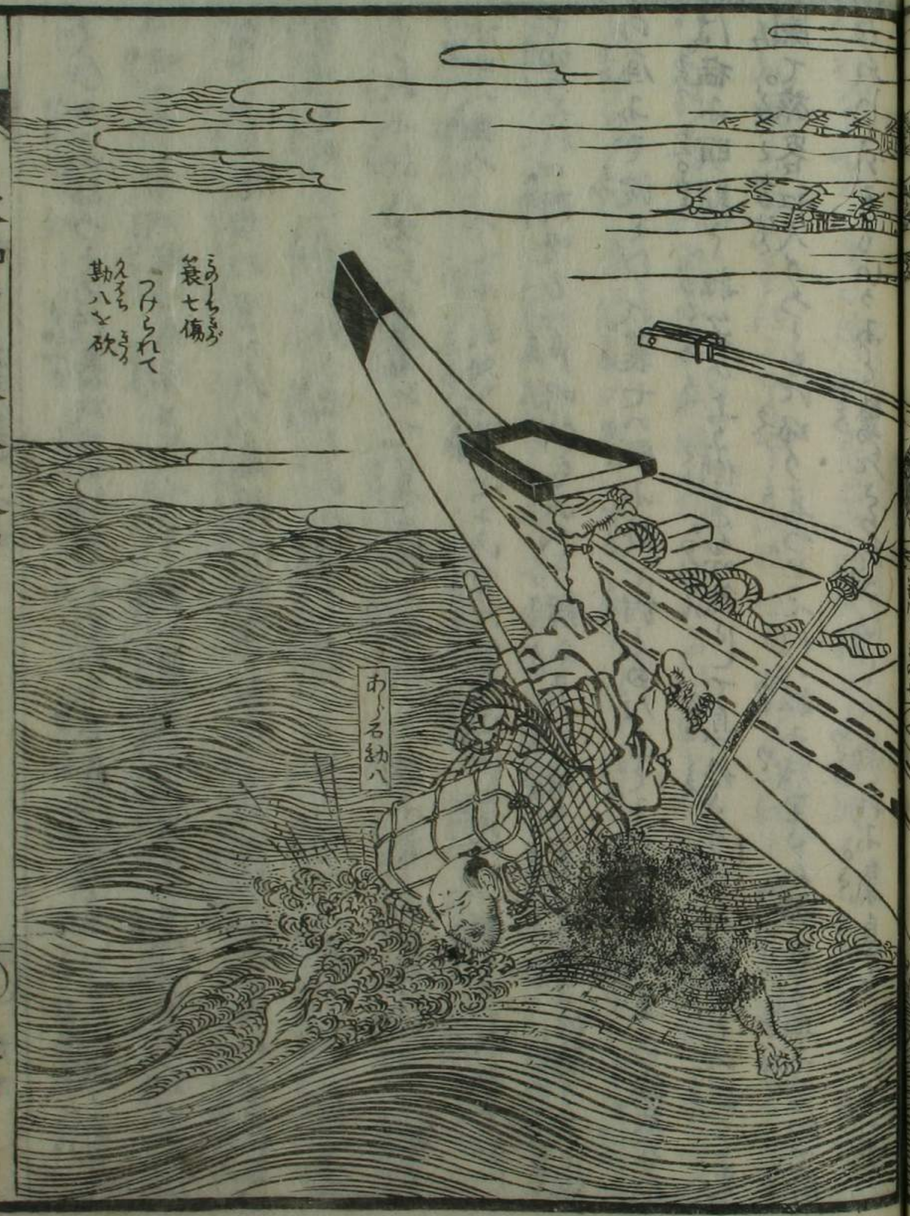
せ。瀬川采女が秋布が娶ひしる。又今度実政に従ひて彼人西國へ赴れられ
しが伊へ笑て。嘉二郎はいよ〳〵猖くそひしかば。いかにもして瀬川博多の両家に
寇して。この怨が復さんとて。頻に兵太と談合しけれに。ある日勘八慌しく
走り帰りて。秋布が日来夫のるが公にとなくそふのあまり。潜に博多の家隷
関養七を使として。肥前國へ遣さにしろ。養七は昨の暁方に鎌倉を發足
せしはし。嗟に笑ていと告れを。兵太はほくぐと笑て嘉二郎をえうへり。しその
途中にて。養七がうち殺し。秋布が書簡が奪ひとらば。瀬川博多を自滅さ
せん謀。これがかて行ふべし。しかれども彼養七は武藝にも達し。人に勝れたる健
足なりと笑く。縦勘八がかて追されども。為課せんるおぼつかなしといひもをは
こうざれに。勘八大に焦燥く。いかなれば他の家隷のこが稱て。勘八をばかくえ悔し
もふぞ。養七勇しといふとも。三面六臂にあらば。路をゆくに速くこと。二翼四

足はあらば僕かならば為課さんじ。しし計あらば示しまへといきほくにぞ。兵太微
笑ていはしへにも兵は詭道なりといへり。俗に所謂誑さにまなし。叙あしくは何
地まぐも跟ゆきて。彼にしたるなれと説示さに。嘉二郎この同答が
笑く大きに欲び。かがて勘八に些の路費がとらしる成就せば賞銭は此
十倍にしたるしといふ。そのとき勘八は。件の銀が捻りうえて。僕今此大
事が業るに。かばかりの路費をあたりては。あまりに本意なし。る成就せば
如此とは賞緑を与へしといふ。手形なりともあらばやと呟けば。加二郎笑
て冷笑ひ。これかく流浪の身と知れば。汝が陥むも理なり。はらばる形がとら
せんとて。硯引はし。さらくと書写めて与ふれば。勘八とれが受とりて。只一足も
はなく。養七に追先んとて。裳が引折。立がふかし。麓のかたへ走り去りぬ。元来
との主従は。慾の一字に他をも傷り。自が喪ふことをも厭ざれ癖者なれば。

ゐんハそを主ゐ疑ひそくる故を乞。嘉二郎を家隷ふも侮くゐて不取とせど。
渋はしうし行狀うり。かくともゐふ況や養七ハ。秋布が夫へ贈ゐる書簡と錦と幾
重ともなく油紙ゐ裹くゐ肩ゐかけ。その曉方ふ漾倉を起徨ゐて只顧ゐ路
をいそぐ。日数経くゐ播磨路まで来にけり。養七が追風あて。船路ゐう行ば只一瞬ふ
ゆくもはゐふ勝ゐてれど。このこゐ彼地へ着ば。ちうせんふかとおもうごち。室の津ふ到りて。肥前の松浦へ
船やめて少く岡ふ。紅人荅へく。望の彼誰時ふ生ゐる船の。松浦へゆくなり。
うふはそや暮ゐくに近し。とし便船ふ乗をしうる。船あて天の羽衣を待ゐふ
しふ。養七ゆて大ゐふ歓び。ゐでてその船ふ乗りて夕餐ゐたうべなどそれふ日ハ
既ふ暮つ。集合の旅客ふそ室の妓君が夜の粧扮ゐてんとて。陸ふ上りぬ。
元来賊が積ゐ船るゐねハ。紅人ゐも。甲夜の往ふ郷よゆゐて。酒うりをうん

とく。養七ひとり不残ゐありて。船ふハ只ゐ名漏
月ゐ瞻ゐふ。そう渋く浪を文字なく
葦ゐて歌絵ふ似たりつて。すべてこの
ゐて眺望なれど。急ぐ旅ゐれハそれふとゐゐもとゐそ。只ハ冷く冴て浦風れ
いと寒くけれバ苫引被ゐて目睡ぬ。
養七が跡を追ふく。やう〳〵和泉の堺ゐて。嘉二郎が奴隷ゐ幼ハハいゐる日うう
ゐは播磨路ふ跟ゐ来うう。この夜養七が私にふうゐ不取とれど。その便宜ゐもうざれバ。
ふとゐに及べり今宵ゐ不下さびそ彼をゐ逐ふ討うふ迫とて。甲夜に殿の
旅客にうう雑ゐく。彼ゐふ集り。私答の間ゐ敬に躰居て。鳥もせざ。
鬼ふとて中〳〵危ゐ哉養七そ。うゐ外ふ人ありうもうぶりけれバ。ゐ不
故ゐて目睡ゐ私ハ潜ふ張ゐく。その時うハ今なりとて。やうふ私答うう

ぢん刎むろの津


あぶる勘八

そひ出こ。ほづその行裏ゆ奪ひとりてこれを誉負ひ。まづふ刀とり抜こ。養七が吭のあたり斫板をも徹よとくくと刺ば。養七忽地殺られえ吐嗟と仆おどろ。ゑぐらこえ永騒ね男なれへ息絶ぇれおりらしてその刃に仆つられば幸はて。灸所を外よ。刃方外ふ向こそれのれが手と反切こ身ゆ起こ。矢庭ふ刀を奪ひとそれふ。勘八大ひ驚ひて。奪よ。ひとと争ひしが。遂ふ敵ひがこけれへ刃ゆ捨こ水中へ跳入こんとこれ処と。養七その刀ゆ取て切つられば。阿呀と一声叫びもあへぞ。鮮血ろと濆りよ。乳の下かけの底ふぞ沈こりれ。養七ゆ既ふ敵と討とめたよでこその労も大事の泳疲ぇれば。猛ふ瞋眩こ。紅女の上ゑ倒よ。忽然として息絶ぇろ。にれ行ふその夜を更園て。旅客紅人りろこもにゆりまつとこれば紅ふ残こられ。旅客ゑ盃ふ塗れて臥なれへこいそもいうあと驚たろぐ。さ随ぐに勤れふ。氣息をとしかうみゆ

ゐれべこていのまぐ綽切れぞとて。時ゆ移さぐ医師を招たは。内好の療治ゆまゆ竭こりのそれをふやうやくに救ひれいうの人を紅ふ無こて。西岡へ却んでかるひがごとて。養七ど紅長が家ゆ紅りそいそく保養さ。その夜の中に紅を泛ひ浄めるごして。結朝縦えを解ろとぞ。かこて養七ハ。紅長の家ふありて。療治ゆ加ふろに。主人こ情めれりのふく。よ病ぢ信ゆうに勤りしかば。等三日に至りて。粥ろぐ啜るやうにろう。かくは又十日のまり次第く。瘡にそとし愈にけれど。主人が情ふく。絶なんと世し王侯と繋ぶどこめくれば養七ハぬるくその庇ゆ欺びゆえさじめてぐ名ゆ名告り。路浪のまをうく人こ賜りて。ゑ創れ價としさていふゆう。彼夜さり紅の中に。つぐ行裏のありほくく人うの内ゑ西山へとぐられ書状もあり。咽喉を傷よとて。且くうのへいひごにちふ。こ後ゑ居ひ

るぐらゐ同ざまし。頂りおとのぐ。こゝらく遍手のひねといふに。主人点頭くげふ彼行裏のる〻ぶ忘れ〻り。にぐ〳〵進〻ぶをべしといひうけて。納戸より一ツれ袱包を引提ぬつ。足なれべし。よ〳〵展見を受とりのくといふハ。衰七ゝ〻ら〻月根を頻めこゝ似たれどもう物にめとばといふ。主人も又不審こいわる夜私と洗そ〻れとそ。無めの世旅客の行李ぞもい。悉く展見〻れど。此月ゞ摺物とおぼしれいこの外まるうりしといふ。衰七ゝ〻ら〻いよ〳〵怪こその袱包をうら刷けば。雨衣一ツと。濱帛女うの物のこゝり。とこその主なゞれよすぐそもなれ書物のやめれそ〻ら〻返〻ら〻〻をれよ。誠のこゝ間ふ一枚の文書めり。足するぐら嵐川嘉二郎う。奴隷ぬ八へらひ〻〻れま敗み〳〵。今度衰七ゝ殺し。秋布ゞ書簡と〻棄ひとろ〳〵ふ〻ふ〻ふ。ちぐ〳〵の賞緑とふん。又瀬川博多ふ自滅さし〻く。秋布ゞ奪ふにをゝ〻。如此〳〵〻賞緑せんと書なりけりてべ。衰七ゝ〻ら〻

〻く。こゝ彼の中にそ者う。これふ傷はけ〻れのの仕。海賊ありともりひしおさ〻ハ和二郎う奴隷みてありこそ。かれいろぐうくのみぐぶ。主家れ夫事生まぬと。ゞ頻りに安かゞ袱どにもなれおぐらひして彼ま敗と巻うし。主人なえうりてい者うこの袱包こそぶ物なゝねど。はゞ少く縁故と考れふ。ワゞ行裏ハ彼衣そう盗賊ゞ奪ひとろ〳〵。支驚ふ遍与〻れう。にもるくば。そのゞみづかゝ脊負たゝ人をつれもゝぶにて水中へ砂こひ行ふ。彼包も渚そもふ。底の水屑とやうりけん今ハ遍ふ日を経れべ。舊の水底ふかのれべうぶ包ぜうちおゝゝ。いづ物ふもめゞぶ。人より預〻くりてゆくなれべ。先ひて面なる所あゝとのつふ。主人かゝくとうちぎひ。もうぶばその袱包ハ盗賊が船ふそさなれそのふこそ。乃ゞ今度の厄難ふく〻人の物を拾ふくも命な拾ひまひべとれふまん儀ハ偉ハ立ゆりて。縁由を告ゞぐ。その主もいうぞう恨るゞぐとい慰めそ。ゞて

対面へ出ふなり。こゝに于て義七ハ。又一層の劬労をほしてぬくゝびゑひめぐられ
ふ。これ今錦と書簡を失ひてハ。往ても還りてもいひ訳なし。しかなれど。今てからぞ
も。嘉二郎が手形を得て。主君の大事をしれうへハ。一日も躊躇しがたし。金瘡全く
愈ぞとも。ほづ鎌倉へ立ゆりて。主君へとの手形をやえせまゐらせん。又西國へ赴
ひて。婿君へや告ゆけんとて。とさはかうさはしひ煩ふ程に痰口ぬくゝひ壊て。苦
痛はじめに深ほしけれハ。又いさげらに日を過しぬ。

第八　錦繍の和歌邊将を召

今茲も既に暮て。あらたまれ春立かへり。鎌倉には。執権時宗朝臣。太宰の
経高。珠伐の祈祝として。博多倍太郎以下の近臣を召倶し。榎嶋幹賊天へ
泰緒あつて。七里が濱を通り来まふに。海士の子どもうとうえて。年の程十二
二方なれ男の童二人。油紙に裹ふれ。行裹とおぼしきものを引あひけり。ちゝ

まゐりのよいなおのれとそ。はじめにうえ出したれば。ことゝへ遍与せとて。罵り争ふ
を時宗遥にうえそなはして。志じ馬の手綱を扣。博多倍太郎をりて二人の童
を近く呼して。その故を問まふに童どもは。執権なりしうえなりて。大に畏り。
ちゝぐしくハ回答ゆけられを。時宗みづからつ叮嚀にいひ諭して問たまへて。
彼ホ母うやくにまうはせう。目今彼首の磯にて。見を拾ひていふ。そからぞも
この行裹が浪に打よせられて。ほとり近う来りしを。おのれ先に見出し。彼後に
取あけられバ。ことゝへ遍与せ。遍与さじとて。いひ争ひされにていとゆせしうば。
時宗件の行裹を召はしてうえまふに。細き麻糸にて。縦横にかゞりたれが。
小さ木れをつけて。肥前國矢田津の陣中。東軍の軍監。瀬川采女ぬしへ
寄奉れ。拙婦秋布とありけれバ。時宗ゆゞて。この行裹を博多倍太郎に
預ふまひて。童に宣ふ。途に遺されものなりとも。私に拾ふるなり。それを私に

七里が濱に時宗
初暴を認れ
はさと倍太郎
北條時むね

拾ひて。つゝ物とすれそ。罪いと多し。汝ホそ童なれバ。いてすへてども。
この後もかゝるわらはせよ。彼行裏そ。その主の姓名を記してのれ
ぞ。いふそうと。返しは。ゆるして。ふかへ許さにう〳〵行ねと。仰とれバ。童ども。いと
畏こて。風の迅きがごとくに走り去ぬ。かくて時宗朝臣ハ館ふなりたまふと
あがて。博多倍太郎ふ。行裏ふ解ゐとして。えらふに。門ふハ秋布が夫へ贈れ
書簡封と。錦一巻のりう。潮無とれを。ちづうて乾して。まづその書簡を
讀しまふ。文章ハ雅たるといふもはゝなり。離別の悲みふ述て。山雞昭
遠くして。鏡と分の恨を記し。独居の懶を舒てハ。蝙蝠赤なりして。扇ふ題する
の例なりう。その辞悽惋としてのがるして。その情親切ふして艶なふこと
聽ゐの落涙せざれハなし。時宗又かの綿をえまふに。尋常れ織ざるふハあら
ずして。百首の和歌ふ織なしてれが。その裏の巧なれ。その妙なれ。
人の及ざれとこゝろゐれバ。時宗頻ふ感ふあつく。博多倍太郎に宣ひけれハ。
むし異域唐の會昌年中に遨將張搔が妻の侯氏ハ夫が任ふあることの
久ふを歎て。同文を綾して。亀形の詩ふ作て。又晋の竇滔が妻蕙若蘭
そ。文旋圖の詩を錦ふ織入てとゝ。夫が秦州ふあれふ贈とり。今の秋布
へつゞ邦の若蘭侯氏といつべし。渠吉次ふ齊眉こと僅ふ七日。忽地ふ別と
くとり。夫ハ生死の場にあり。再會の量がゝる不悲こと。
吉次を召ふて。秋布がう〳〵涙を安んじ給ふせんふと宣へハ。倍太郎答まう
ハく。仁君上ふ在そ彼ホ之ハ莫大の恩恵。不思議の僥倖なり。
ゐれどもこのゐにようて。吉次と召環さんと仰のバ。秋布が父孫四郎ハ恩愛
ふ溺ますて。忠義を缺のふねバ。世の識をおりひ。塔のうんとこゝろ。
て固辞まうひべ〳〵ゐ。又秋布も貞操あれ女子なれバ却ふうゝうひべ

よしや彼親子のその固辞中さんとも。吉次のその妻の悲慕によつて。召
かへされたとあり形がら。いかでか阿容々々と立ゆりかへれ帰るとれは世の胡慮
となり。ゆるされは君の命に違はんをおそれ。忽地に討死いたすべうのやあらん。
世言に。公あつて花を栽れは花活ぎ。意なくして柳が挿ぞ。とかく蔭といふ
ことあり。得と賢慮がめぐらしまへしと。悍れ氣色もなくまうせしかは時宗
朝臣かたまつて宣つふやう。汝がヤスとこれ甚理りに稱へり。しかはあれ。東軍數千騎
の中より。吉次只一人が召へさは。九牛が一毛なり。一將を得がしといへども。貞政乃
軍配に干て。おほつかなれ所なし。且秋布は。こが母の愛ふれのにおほさつる者なる
に彼女子哀慕に堪ずして世が去れこともあらば。ほとそ不便におほ　らゆ。
時宗が母をもひなすれも。秋布が夫をもふを。恩愛あへて異なれ。ここは　愁に
明白にいひしらしてこそ。孫四郎秋布も因辞まうし。吉次もゆるべからん妻にも

舅にもしらせずして。猛に吉次が召へさんに。彼又何の故ともしらんそ。違背せん
ずうはあらじ。この使を委んものは。汝ならで外にはしらず。彼地に赴れて。吉次が
おくふれしと仰すれにぞ。倍太郎不覚に感涙を押かす。貞婦忠臣の下に
出れも。賢君上に在さが故なり。寔に彼ホハよれ月日の下にすれて。かくおわけ
なれ仁愛を蒙りなすれよ。とまうして。異議なく領掌しまうしかば。時宗やがて。
件の錦を直垂に縫して。秋布が書簡と共に倍太郎に授。汝彼地に至らば。
この直垂が吉次に與へて。こが命を傳へ。又書簡は假初にのてまうしおのらし
てとゞけ給はせよ。しからば吉次聊も疑ずして。汝とともにゆりまつぞれなり。と宣
へば。倍太郎兼て。件の二品が受とりなす。俄頃に行裝を整て。従者はいと
ゆかし。次の日鎌倉を起行しつ。馬のひを西に向夜が日に継ぐ馳たりけれ。この
る世に披露がりしかば。瀬川博多が家に告れものもあらば。秋布は春になり

ても。養七が帰り来ざれば。いよいよ絶えなんとなく思ひて。寝食も安うせざ。痼
がらにて日をおくれば。俊平もこの故に公を痛め。父の弥四郎は女児が為に鶴
岡の八幡宮へ参詣して。鷲の羽の征矢二條に。願書を添へ奉納し。賊徒
速に誅伏せよ。吉次を恙なく。凱陣あらせまへとぞ祈りぬ。げにや武夫の母と
け公も子に引きてくは。公よりも祈りぬ。されば神は誠あれ人を守まへども。
宿因の禍を救ひまつるに由なれば。やこの願書より事起りて弥四郎が身を
喪ふとは。後にぞ思ひあはされけれ。

松浦佐用媛石魂録前

松浦佐用媛石魂録前編下巻

東都　曲亭馬琴編次

第九

龍神洞に孤客命を知れ

太宰府の守護。平経高が股肱の家隷に。牛渕九郎清縄といふそのあり
けり。原是何ホの人なり。とその素姓をたづぬれば。父を岬平馬清廉とて。
三浦泰村が譜代の郎黨。忠義毎二のものなりし。しかれに泰村を。後深艸
帝の御宇。宝治のせじめ。北條一家の威権を猖ぐ。謀反の企ありしころ。清廉
しばし主を諫て。終に用ひられど。却出仕をとゞめられしかば。平馬はいたく
これを歎き。忠臣面を犯して。君を諫うに。その言用ひられず。縦眼睛を東門
に掛れとも。又何の益かあらん。只身を殺して。君がこづからなせれ孽を禳ひ
除んにはと深念し。一封の遺書を写とゞめ。腹かき切て死にけり。清廉が死後

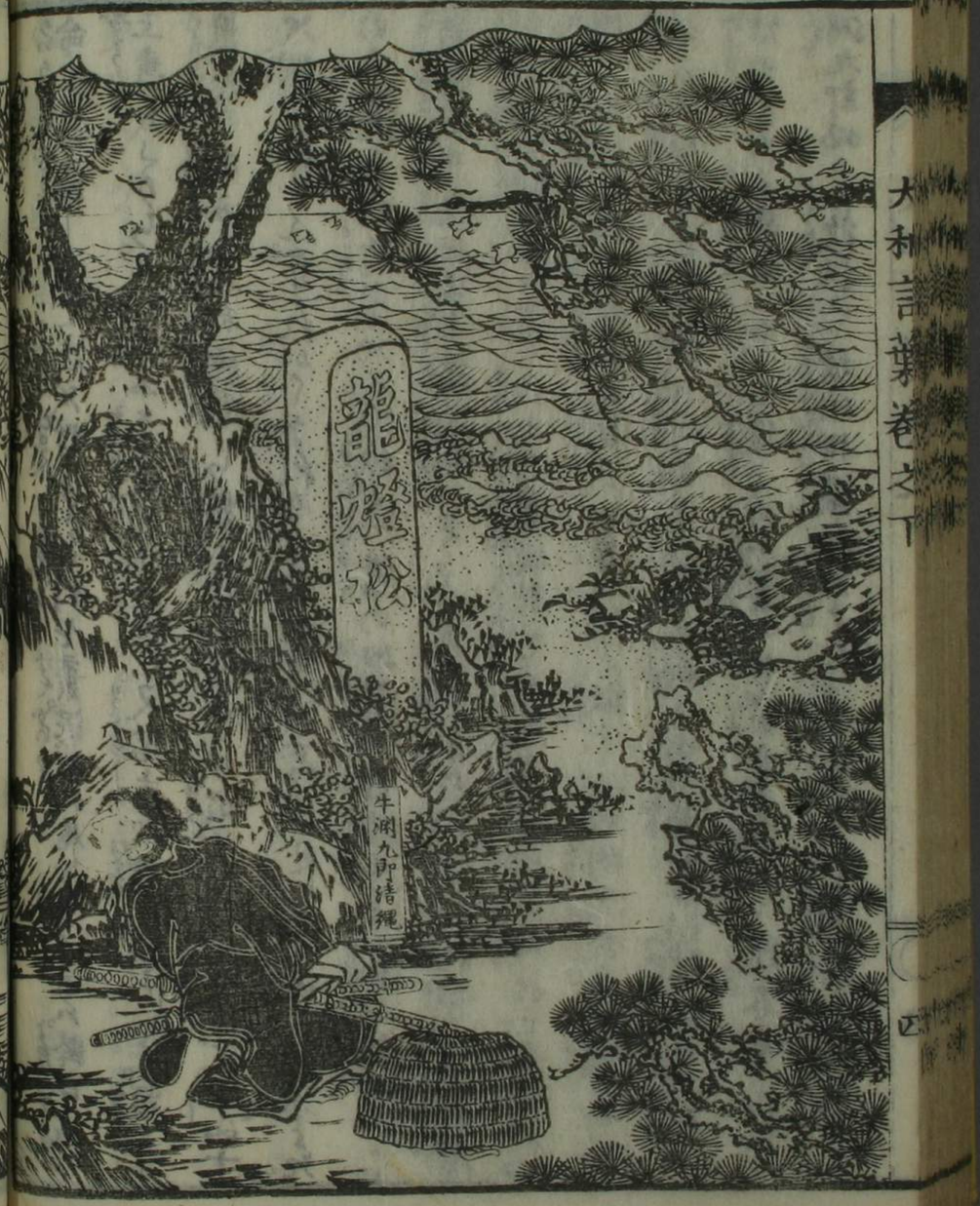
ふ。彼逆書ぶ披露ことしくども。泰村終よ逆意ぶおりひくぶされ氣さる。
まうへれ。その顛忠ぶ憐こけん。清廉が咽くりの子ども。ぶ扶助ー。恩恵頃
厚かりけて。さるれ役に宝治元年六月五日。泰村俄頃ふ親族ふ令く。軍兵
ぶ召集勅校時頼朝臣の宿所へ押寄く。猶員を一時ふ決せんと計較る
が。縛忽地ふ發覚て。その日の軍利めくぶ。泰村父子う征辛じて法華堂
にこ退て。こる悉自殺せり。かくしうば。岬平馬清廉が子ども。豪子ふ女児
まく。次男ぶ淵九郎とふふ。年る幼ふて。母そ去年の秋ぶまかて。父そ
この春自殺そく。ううべなく孤る
おりとて。日耳親ーそこにも疎まいくぶせんそべなりしうば。同胞泣て鎌倉
ぶ遂ひ出。些の由縁ぶ便りそ。摂州尼が崎に赴て浦人の奴婢とるりて形を
世ぶおくりけく。ろこにめれとと十年めまり。艱難憂苦の中に人となる
けれが。淵九郎ふ雅たりその志逞しく潜におりふ母うつぐ。ぶ命渥蒸く
ちく浮世ぶ挽こかく。民間ふ零落せ。人の奴僕となり。紅人ホに撩役せら
れくといへども。父ふ泰村めーれ忠臣なり。加猶三浦岬そ。元親族ふしく。外様
の家隷とおほじかくぶ。これぶるれいうふもして鎌倉を攻滅ー。亡君の仇を報
ぶやと思ひ定めおぐふ。姓ふ名中の機密をちふせそで。あれ日同胞。人ふた
ぶ集合て。行末事ーかこのる母ぶ話りけぐくれ序ふ。淵九郎がいふ。母う。姓
ぶ本も。これふ十ねまう増くおかとれば。昔鎌倉にありけれ日れ系迹
も。そくくー記てそおかそふふ。つぐ引そ何ごとも父の如うにく。父母の面かげ
さへ定うふ認りいひどしも三浦の忠臣と呼ばこれ人の子とし。汝風
に吹ら旅されいさぐふに浦曲の掃なるのとして。生涯なさこさんいらと杉とし。西
國ふへ菊池原田なんぐーて。名こそ武士も多めれば。同胞り終ともに役地ふ

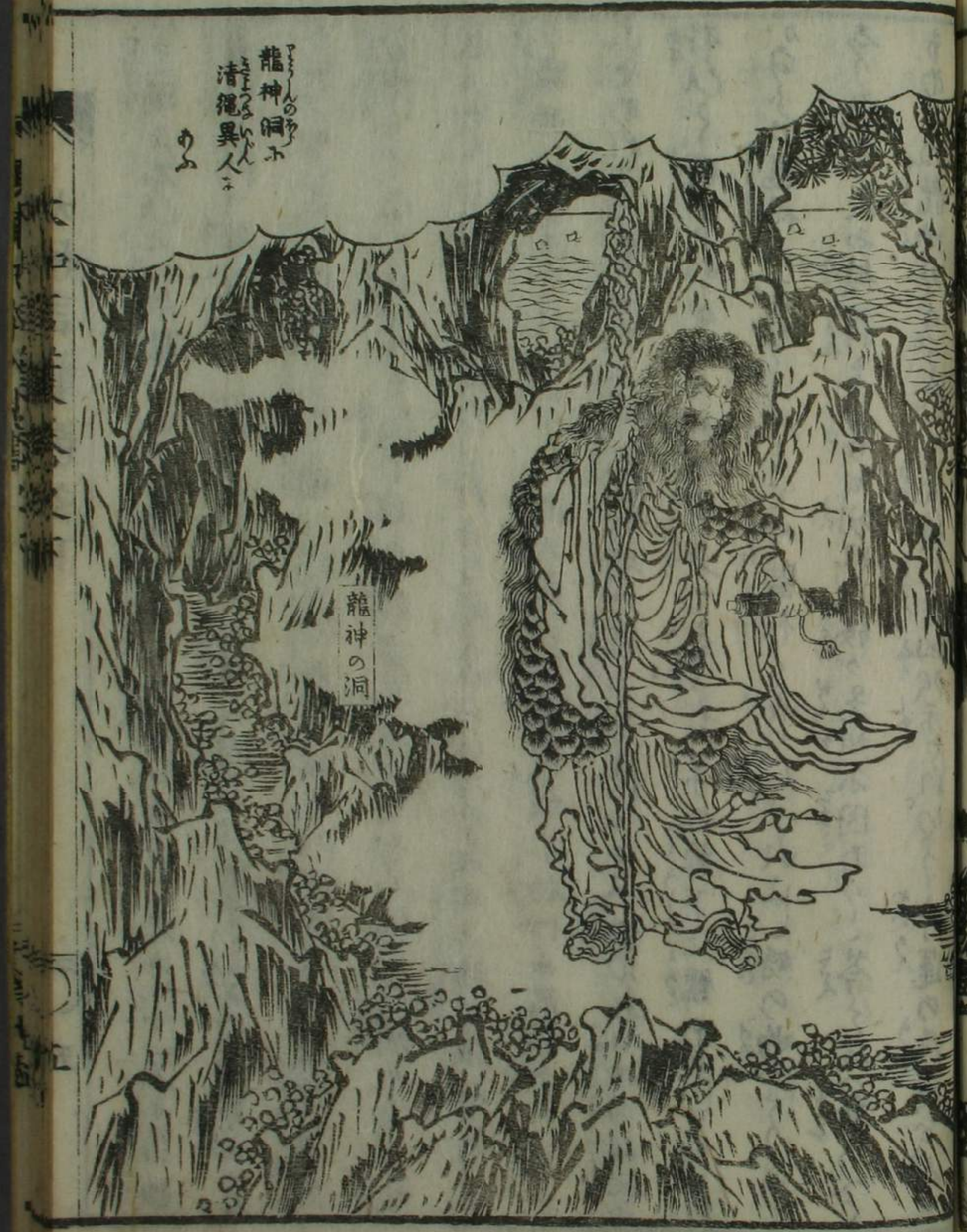
おけるも縁なかりき主どりせざるやとぞいふなり。おもひさだむべしといふ。姉も年頃淵九郎が志大にして。かの用に立まじきものなりとて。そをさけれども。かくもあれ。何計らひあへと差しかば。淵九郎大に歓び主人にいへ。故郷へ立かへり。親族に對面して。父母の墓へ詣て後に。又帰り来べきよしをいひこしらへ。暇の暇をあたへれざといふ主人ゆるし。彼亦ハ年来信ありし仕へられしもの形れバとて。いと綴よくとれが放し東へ下る道もそへけし。是ありてゆたかねとて。路費よりほどこしたまふ。それゆゑ同胞いよよ綴こび。ありがたく遂に尼が涛と旅だち。東へ赴むきして。只願西へ急てゆく行ふ日かずを経て長門なれ赤間が関まで来ふけるさて。この津より便船求て豊前の小倉へ渡らんとしけり。夕忽地姉を見うしなひて。ちさに驚き彼此を索めて。その日ハ遂に船ふ乗らず。次の日も又浦曲にもとめて。牛崎。室津。畑住。新五宇加。瀧口。神田。阿川の漆

漆を索め吟ひ。是者彼岸にて三日と費しけれども。絶て姉に環會はず。に至り淵九郎ハ大に後悔しられ不幸にして。早く父母に喪ひ。姉の養育を受て。その恩父母に異ならず。されを青雲の志已がつよくて。遠く西海に漂流しおもひの外に同胞離散して。姉の往方がしれず。かかれバ再會を又計がたし縦一旦ハ綴しそうびしても。蘇張が列國の印が帯る日ありとも。姉の高恩が謝せべきすをしらざれ。益なき似たり。よしなき便なれ。られ津國を漫に迷ひ出られぞとて。亦一層の憂苦をまして只このうへハ神明佛陀の冥助が祷るにあらでハ姉の往方がしれがたかるべしとてこの日より道次ふある大小の神社へまうで祈念を凝しつ。阿川の山あひに向ひて行こと幾ハ長なるに海へさし臨みて出崎あり。其のさきに龍神の洞といふあり。又龍燈の松とて。いと古りたる松ありけり。

渡海の船り風濤の難にあふとれハかの洞に禱れにかなふぶ慈験あれよし。浦人の物がたれを淵九郎不圖ゆくて。癒て件の洞に系詣し。祈願すること前のごとく。殊さらに丹誠を凝らしけれに。頃しも三月の下旬なれバ。海上日和しづかにして。風景えもいはれど。長途の疲労に。おりはども。彼龍燈の松が株を枕として。しばし目睡たれ枕辺に人ありて。淵九郎こゝこと呼びそれも声せしかバ。ゆをらぶ頭を擡げたるんかへれバ。白髪童顔の翁端然として。傍なれ巖に尻をかけてあり。被る衣を海松のごとくかれ垂たれど。その文をいまだこれも馴ざれ。錦綉の類ゆや。光曜くて。魚の鱗めれたれに。手にもたれ秋を。朱よりも赤くて珊瑚に彷彿たる。淵九郎ぬかく怪しみ。との翁を。凡人なりしとおもひしかバ。岸破と身を起して。そのほとりに跼踞しつ。翁ハ熟と淵九郎を視ていふやう。壯佼。汝ハ志大いなれども。惜らくを

命運甚薄し。そし志を將して。名利を棄。泥中に尾を曳んゆハ。齢百歳の上壽をたもち。人の為に為敬せられざし。又宿志を將しけざして。頻有暴慢を放にし。名利両方から懸念せば。その事成ざれのこなりで。年四十を越ぎたからん。とまれかくまれ。今より廿年を孫て。はじめて妍にあふとれあり。これこれ所あるをりて。汝に一巻の秘書を傳授すべし。汝が才をもて。熟讀ハ。天文地理。卜筮説相ハさらなり。兵家の大事を開悟し。又間諜の奇術を行つぎたなり。只その業成就をとゝいへども。これを用れとこ行なし。僅に賣卜して。一己の口を餬ふに足るのミ。強てその術を放して。夙志を遂んと試をとれハ。身を亡すも又その術にあり。努おりひ怯て。こゞ教に悖なせそ。と説示し。ゆがて懐より。一巻の秘書をとり出て遍与せしかぞ。淵九郎ぬかく欲びて。数回押戴れ。某をかしこでも。かゝれ賜を受ゆに。なでう


龍燈松
牛淵九郎清縄


龍神の洞
龍神洞ホ
清縄異人ニ

等閑よそひいべた願くはつぶ師。明白ふ名氏を志しるべ人しとしめふ谷羽微
笑て。それい名もなく家もなし汝が先祖ま因めれをりて。言こに及ぶのこ
といひもそうらひ。白波るく磯を洗めて。葭と群くろ水鳥こゑもて。翁い忽地
金光をそなら打久を浪を踏ぐ。往方もわれぞなりにり。渕九郎こそ忙
惹と志ぢし其方を目送つ。それふもめくぞついかさ付ふ海上浪おさまりて
夕陽西ふ没んとる。そのとき渕九郎い。小膝ふ跪と拍げみ号び出せ。こと
ごとめれつぶ曾祖へ。三浦介義明の庶子なりしがその母めれ日岬の祇辺ふ
おひく。感ぞれるのみり。終ふ有ざ対て産くれ子の腋下に鰊ありしぐこれ
かるのぐ龍神の子なくんとて。岬龍村と名つくれよし婢の物かくりみて
志りぬ。志るれふ彼翁その名ふ問れて。汝が先祖ふ因あり。こ答くれい疑ふべく
もめりぬ。龍神なり。それく向後の吉凶ふ示され。命運の浄を知りて
なぐぷふは大ふ号び企ても。頼りかくぐ已なんくとひとりごちて。逐ふ
風志を遂ん。只世ふ妥ふにもくらんと恩紫しつ直に九州ふ赴歴ふく。潜ふ件
の秘書ふ熟讀し。中發明それとこ施ありて天文地理。卜筮説相軍学の
奥旨。間諜の奇術をよくしたといくども。龍神の教ふもりて一トさびもその術
を施さぐ。ゆくくて筑紫の太宰府ふ到る。岬渕九郎を更て牛渕九郎清縄
と名告り。賣卜して生活とそれふ。そのトとこ志ふ。雲ざりしかは。
ま多人ゆくく当信して。今の世ま指の神子なりと稱賛を。おれども清縄そ。
渕俄と受れとと。僕ふ十銭と定めて。その餘ふ貪くぐ只管清貧そ楽めこ
そ。こにおれる九年に及びしぐ。太宰の経高謀反の企めるふよりて。そ
て一藝ある者ふ扶持それふ。清縄ふ日ふよくありて。頻ふこれを招げせるも。
牛渕九郎いよく推辞て。招ふよ参ぜざれを。強ふる時い礼儀ふ厚くしてその使

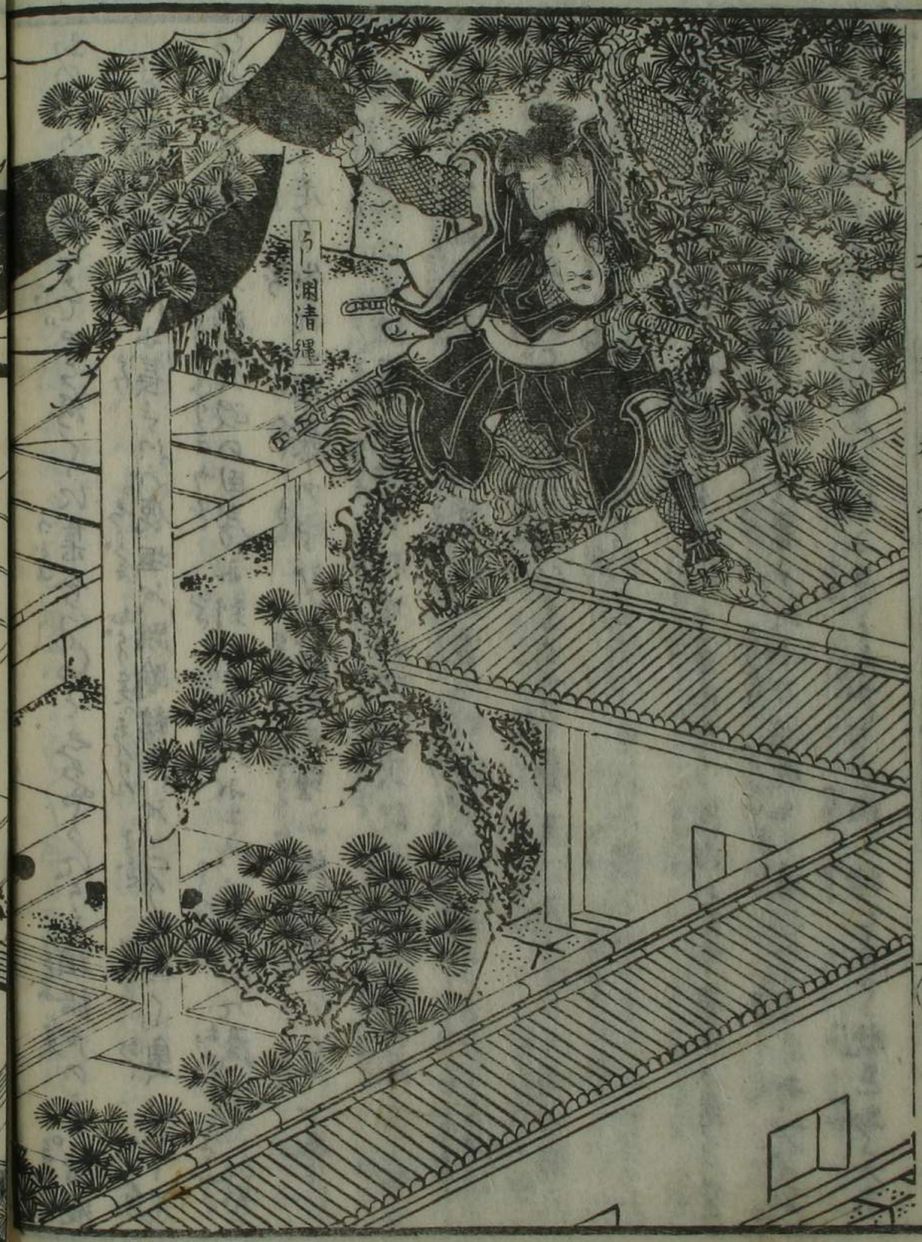
府三度ゐ及びしうば。牛淵九郎脱ゐて言語なく。とさまかうさ伍おりひさゆ
ひしぐ。羊羽筑紫ゐありて。世ろそなれゐ威徳あれ人ゐ招れて。すゑ
もゆてさ。これを附せざゐ却失敬の罪ゐ責られべしとゐひて。懲て城中に赴
さ。経高が老臣ゐ就て。日羽の恩恵沸うざれはしをゆえめぐうに経高そ
牛淵九郎ゐ羽わりさゆて大ゐ故びうおく城中ゐ留れてとさ二日。さもべゐ
食意さし。老臣うれくに利害ゐ説。すべて守護の渦ゐに塞うべかくても
ろ雅辞のうぐ。生涯この城中ようゐ対へ出にじとうゐ。清縄へかくく叮嚀なれ
に心ようくおぼそく。忠に己とゐ紛ぐざ。主君と頼をなるべしと意ろ。
にる往ゐ預るへ牛淵を後悪ゐ忍びて。対面に見ゐの出物うて。
鎧一領太刀一振鞍おさうれ馬一疋ゐ賜う。てづら盃をめぐ。食意初め
に弥増うり。そのとゐ清縄へ。ほくと往当ゐ相をれゐ。謀反の氣めうれ
う。もろも事ゐ遂ざれくゐ意の中大に驚ゐ。只管後悔さうしうど。
既ゐその拒ゐ意じて。言下にこれゐ違背せざ。忽地に罪せざれのこうぐ。
ご。ゐ後ゐ胡意なる色。これおりうざ。白泡増と恨ゐ筆くさるるよと嗟
嘆て命運の係るとこゐ今へかうと。ゐくいく往もなく謀反ゐ起。清縄とりて軍師とす。これ清縄へ機に偏
ん愛ゐ意じうぐく謀ゐ述れゐ。経高そ。その人となり。識量狭く。人を疑く
決断なられべ。その謀ゐ用ひざ。清縄大に焦燥て。ゐ勢僅に二三百人とゐ
て。肥後国ゐ押渡う。菊池原田ゐ攻靡。肥前の菊池蘭波ゐ屯。勢ゐ
九州ゐ振へう。ゐれゐ。北條上総ゐ執権時宗朝臣の命ゐ稟て。鎌倉
ゐ進発。舩路より肥前国に赴とく。矢田の津ゐ陣を布。直ゐ清縄と討
んとさ。清縄縁由を知て。實政の軍配侮がくゐひべ。彼こゐすこ

戦ぞ。両陣巨海が隔つ。疾視あふていさゞらに日をとゞし。そやその手も暮
てゆくなきの春立くりかけれど。寒さ冴まさりて。雪降つゞきされバ。敵も身
方もいと徒然に堪ざらのとぞ瀬川采女吉次ハ。大将実政ふ密語ていくりな
る。尓聞牛渕九郎清縄ハ。不測ふ間諜の術をもちりとなん彼去年よりし一ト
たびも寄せ来ざれバ。必定別に謀めぐらすべし。常言に笆外の犬ハなほ防べ。
壁隙の風ハ禦がたしといへり。牛渕偷潜入ゞく不虞のゆすめらバ臍を噬とも
及びじ。大将ハ今宵より某と臥房を換へ睡まくらし幸に子密が便室の
榻を腕ひ臥ふべくなのかと。信ずらていふ。実政ゆて志じ尋思し示さうとと縡
理かれども。そらじも備がけくるものをら。ななほ不仁なりといはずや。斯るを故つぶ
身の厄難を避んとて。人が危をみ代ささるるハ勇ゝのせざる所なりと回答
て。兼引きをるよりしかば。吉次かさねてまうさばは近習陣中に罪ある者の

死刑を放し是をかのてかうじなし人がくそれとされハ。その人牛渕が為ふ命を隕
されとても恨なかれぞ。びかり事顕じて敵の刃が脱ならバ。九死を出て一生を
得。なぐ自の罪状贖に足うん。まげてたす許らびしまへしといふを。実政やう
やく諾なひて。近習令を犯してその罪死ふ當るものゝ。年紀貌粗大将ふ肖
なるを擇出して。その罪を放し。密かに縡の趣をもふくめおきそのもの訣ぞ
余を稟。毎夜ふ大将ふ代ぞ。その臥房ふ睡りつ。吉次又壮士二三十人を。帷幕
の中ふ伏て牛渕り忍び入ふれバ。引畢て討とるべきよしが促え志つぶじ。その身そ
出居のうち少し引入られ処ふ直寝して通宵睡らバ。實政又士卒ふ下知して。
毎夜ふ舞を禁し。ろかうら四隅をうら巡りて用心極て堅固なり。けれ經ふ
牛渕九郎清縄ハ。去年より飛蘭渡ふありながら。実政の大軍ふ比ときそ。マが
衆ハ十が二三ふて勢ひあさりがくし是しかば。敵の寄ずぶれを虎倖出して。一トたび

動うごかず。つくくとおもふ所に。それその比じや。経高小賺すかされて。龍神の教誡ある時。遂ふに五斗米の為ために腰を折れのこなくに。班度の大事を謀りて。百戦百勝の奇計を述べて。用ひざるれば。経高暗愚にして。彼人傍代恩顧の家隷なれども。とても。かくても死ぬる分なり。せめて北條の親族なれば。実政を驚かさんと。古主泰村朝臣の冤魂を慰めんがために。その志を遂げよと。且経高ねーの謀反を起せーと慫慂りつゞ。実政が驚かんと。戦せざる。寡なくて衆に敵がたし。只夜ふ紛れて潜入り。実政が首を引提げ。走り帰らんのをと。泳念ー。腹心の兵士ふ機密を告げて。陣中を守らし。頃ーも正月九八日の烏夜ふ。等しき雪の降るふに。清縄かいと引かく打扮て。只一人小舟にうち乗り。矢田の漆ふわーと渡りて。小夜深れ比及ぬ。実政の陣ふ潜ぎ入れば。堂ふもる〳〵陣るわざた。番次の兵士も。

あのばうら懶げそ。とろ〳〵に集合つゐとあやうたらん相語声のこそ清縄そ。元来間諜の術ふ長ずべ。鹿垣を跳踰轅門を入りて。輒く奥ゆく忍び入りつ。遂ふ大将実政の臥房ぬ到ぬ。忽地ふその首をかゝ落〳〵。警かい廻て走り出れふ。帷幕の中なれ。壮士も頗ふ睡を催してそれとあらざ。只燭ん吉次のこ睡魔を退けん孤燈の下に史記の刺客傳を閲ーて居さりけれふ。忽地癖者ありて。假寝実政の首を引提げ外面へ走り去ること。吉次倩と見るく。さらや牛渕どさなれ。と叫びもめくど驀直に飛うりて。盂子鐵入なれ頭ぬの鍾をこそとうりて引えんとせれふ。豫く忍緒と放おたされや。仰さ反ふ引対ーて。頭巾そ去次がまに逃り清縄ふそや。鹿垣ふ走り登り。又こそ。吉次大ぬ焦燥て。太刀に著〳〵れ小刀ぬ脱ぜー追ひつゞ丁と打かゝる。清縄そ越〳〵もせざして。これを袖ふ受とめ。ゆとふ頃を踏こえ〳〵脱ぎ出〳〵。


うし 明清

せいうち

その胖響に宿寝の壮士番次の兵士おどろき騒ぐ。まふく器械なども追篶人と聞くば。吉次えうて。牛渕どの。それ追留て撃とうべし。おの〳〵そこを路と断ふさぎて。這奴を飛蘭渡へ帰さざれかうにも配あうくといひみて角門を押開て。飛がおとふくに追くゆく。大将実改縁由となして。豫て謀つる事なれば。俄頃ふ軍兵ども三まにてうけ。その一まは清縄が陣中を守らし。残れ一まの軍兵なおて。直に飛蘭渡へ押こう。清縄が陣を攻破りその屯舎焼んとて。馬ふ肉うとら跨。鞭を揚〳〵し。泳雪を踏〳〵。擬ふ捺ぐ走出ぬ。主に劣らぬ壮士ども。こゝ後ぶに引ちふたり。かくて激川采女吉次と。頻りに牛渕清縄を追篶く。ふ間近くなれ行に。牛渕ふ疎林の中へ走り入りて。忽地えそを射しうば。吉次ふもろく焦燥て。雪に印ふる我足迹と葉ふしさまを何処までぐく追篶たりとても牛渕九郎清縄ふ。敗戦を好ふ足ふ信〳〵く脱走り。ゆくりなに烈〳〵く追ぶしうば。彼を遣さざやとおりひて。道もなき山路ふ向ひてうさばらに足跡を残〳〵。逸巡〳〵て主候て。道ふ横さまに。径ふかゝて。踏〳〵ふ雪ふ捶埋めけ。ゆくりなに吉次を出〳〵拔て。直ふ飛蘭渡へ帰らんとすれふ実ふ政の軍兵ども。夜ふほの〳〵と明こうて。沖の方を估とうれ。飛蘭渡の陣もとや攻落されねとおぼく〳〵て。水を戦。こゝふ仆投〳〵て。あるふぞ。清縄大ふ疑惑ひ。躊躇〳〵ておりふ中う。実改の軍監ふ。激川采女吉次と呼ぶるの。ふ羊弱されど。智嚢ふ富ふにめ〳〵た軍急孫呉を学ぶとゞ。しふて敵ふ倣めり。〳〵大将実政ふ誅されうふ陣中以の外ふ騒動そゞろよ。却てふが為ふ路を遮り留め。主将のなれ死ふ。飛蘭渡を攻落〳〵て軍配。甚奇うふ。されバこの首も実政ふをめ〳〵て。

質物にありけれかとて。はらくこれに枯首なれど。その骨相西夫の面貌に
しく。大将の首級にあらず。さてハ謀策られたれ朽をしさよ。とむとりこちて。
蹉跎されともそのかひ口。ここに至つて。いまゝ龍神の教誡あるべかりを錯
ざれを感嘆し。嗚呼これこそ死んかといつて。合ふれ首を雪中に撲地と
投捨又道をとつてかへし。末の龍華のかたへ走りけり。

第十

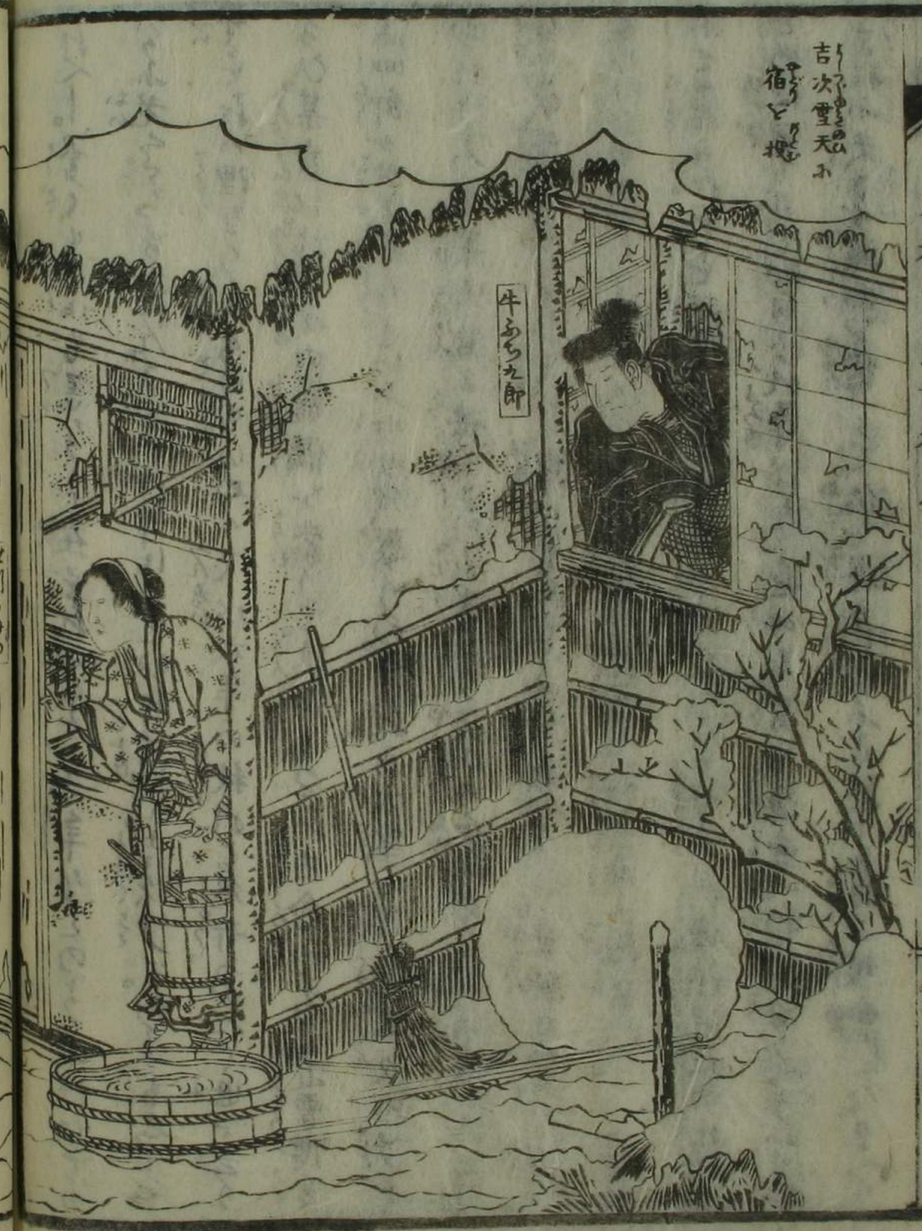
末龍華に親族全く聚れ

明れば正月九九日の早天に。北條上總介実政ハ。瀬川采女が謀によつて。
牛渕が花蘭渡の屯を撃崩し。討とれたる河の首級を砍梟。さて暗
号の蜂夥をかて。矢田の身方へしらしけり。かゝりしかば瀬川吉次ハ。清繩が
陣既に破れたれをしつて。はしく勇をこゝろ頻に牛渕を追詰て。討
とらんとて。なほ彼此を徘徊されに。野も山も白妙の深雪の外に物も
なく。斥てゆくかたもおぼつかなくて。不意も末の龍華に迷ひ出り。通雪
走りたれに。いたく餓て寒怯かたければ。道次なれ。草舎に立よりて。斜
なれ。片折戸をはしくと打敲に。裡より老女の声して。誰と問。吉次答へて。
これハ深雪に道を迷ひて。餓に臨れものなり。しばし憩して一碗の粮をめぐ
みたまへ。翌そかなるべ厚く報ひたてまつるにと。いふや。件の老女笑もあへず呵し
とうち笑ひ。あるこが子。ちやなりたれ欲。いつまで童めたれはさなどして。
老たれ親を殺たて拵ぶぞとくく裡に入れやしといふに。吉次ハそのこゝ河を
得ぞいる。これハ近曾東より来れるものなり。そなたこそ正なるのハいへ。これいか
でか人を殺くぞれと呟けば。老女そはしてくうち笑ひて。汝ハ叔父に勸んとて。
酒を買に出たれが。人にもさゝめでまづいたく醉たるを。ある鈍ましや。年来
耳なれたれ。こが子の声を笑悦つそのかハ。開よと思ふば。などて明白ならず

えぞ[れ]。この雪に寒く[ゐ]る[れ]ば[ね]。[と]いひ驚し[つ]く。蒸[さ]れ庭ふ掻捨[さ]る。雪の中道を。木履穿[き]ちめて歩[む]を出[だ]そ[ら]折戸を開かく。吉次[ぬ][か]とこんかうえろ。怪[あ]しや声も面影も。紛ふ[べ]くもめ[ら]ねころ子なれど。[ぞ]身は腹巻を[し]。小[こ]太腰當[あて]。武者[もの]態のいと勇さよ。この暁[つき]み[ち]蘭渡[わた]に戦[いく]ありと[や]。[ら]れが落武者の物[ぬ]具[ぐ]剥[ぎ]とりてや[ま][ら]れ。[て]彼人の後[あと]を追[お][ふ]遣[や]る人[ひと]捨[す]ろぞ。[ら]れ[ぬ]獣[けだもの]の[ら]なり。そ[ら]りて[ゐ]さて。そのめ[ら]へ返さんか。えこそ裡[うち]へ入[い][ら]と[て]涙さし[ぐ]ん[ぐ]ん怨[うら]れ吉次[きち]そ[ら]。微笑[ゑ]て言[い]ふ。老女[ばゞ]笑[わら]け。世[よ]の[ゐ][ら]れ人[ひと]夥[おほ]し。神の代[よ][ゐ]天稚日子[あめわかひこ]の。阿遅志貴[あぢしき]の神に似[に][ら]れ。人の代[よ]は[し]て[ゐ]武内宿称[たけのうちのすくね]の。壹岐直[いきのあたひ]に似[に][ら]れ。あるゐ孔子[こうし]の陽虎[やうこ]に似[に][ら]れ。何尚之[かしやうし]と顔延之[がんえんし]が猴[ましら]に似[に][ら]れ。他人[ひと]の猴似[ましらに]といふも是[これ]より出[いで][ら]り。[ら]れ[ぬ]誰[た]よ似[に][ら]れ[ぬ]ろ[ら]ん[ど]。東軍[とうぐん]の軍監[ぐんかん]瀬川采女吉次[せがはうねめきちじ]とぞ[ら]りのなる。今暁敵将牛渕九郎清綱[うしぶちくらうきよつな]を追[お]ふて。途[みち]ふ[ら]れ[と]そ[ら]し[う]。漫[そぞろ][く]事[ごと][ら]りそ[ら]し[う]。想[おも]ふ[ら]て。濡[ぬ][ら]れ衣[ぎぬ]も乾[ほ]せよ[し]。大将軍[たいしやうぐん]に[ま]えめ[ら]て。十二分[じふにぶん]の報[むくひ]をもべ[ら]。いふもと[ら]を[ら]ふ[ら]ふ[く]。げふ[ら]ひ[ま]ぐ[ら]り。東軍[とうぐん]の軍監瀬川氏と宣[の][ら]れ[ば]何[な]と[や]ん[と]て[ら]ゆ[し]。[と]し瀬川健三道孝[けんざうみちたか]とい[ふ]人の子[こ]ぉ。乳名松太郎[ちなまつたらう]と[ぼ][ら]れ[ま]めびぉ。と問[と]吉次[きち]笑[わら]もめ[ぐ]ぞ。[ら]れその健三道孝の家子松太郎[いへのこまつたらう]と[ぼ][ら]なれの[な]かぞ。[ら]れ[ゐ]ふ[ら]ん実母[じつぼ]ぉ。[ら]ぎ[ら]れ再會[さいくわい]ぁり。と立[た][ま]ふ[ら]ぁの[ら]。母[はゝ]水江[みづえ]の浦[うら]ぶ子[こ]の[ら]りし[ぉ]ぉ[ち]。子[こ]ぉ又[また]朱[あけ]の朱壽昌[しゅじゅしょう]が母[はゝ]よめ[ら]ひ[ま]れ[ぬ]乾[ほ]びぉ[て]恩愛[おんあい]ま[ら]ふ[ら]ぁ[ら]。[ら]りそのとそ玉[たま]ぎ[ゐ]ぃ。[ら]ぇ[ら]秩[ちつ]ふ堰[せ]う[と]。目水[めみづ]をそぐ[く]抑[おさ]ひ。寔[まこと]に親子[おやこ]の

因縁竭を。命ぬり春なりて。かく環會喜しさよ。さるま浦二郎とくもれ
らの列ふ移りたる。縁由を爰くの物語みてよくきりてぞ咲そぐた離別の後
そ一ふしびも。こえく音づれ聞えざりし。正室木綿妙どの為竭を信そ世の
中の義理こそいとふ苦しけれ。これべこの顕身の息れ肉あんはしのおら
ざりけりとそふおなひとやふ端うくもあんとふ。ぬうた數たいちくねん火の
流紫の果より薪樵。鎌倉山を出れ月の。西へとおりひ沈むふ。その暁の寝覚
渡そえて。九年の娥冠察しまう人。艱生のよく肖りのとりどかくまでも兄生ろ
ろも違ろぞ。ろのう私面影のこう声音そ。ぞれをいづ逆とうたがじされ
ぐれ月を浦二郎ろりとして。物いひつれを笑ふるは。爰くの子ろあれ
ど。浦二郎ハ野山の神にて。いと驚きく。孝行ハ人ま勝まそ。
弱きろのあいと憐なり。今ももめれゆりまく。かくまでぱさそろ欲ひね

まべし。爰くも母ハも恙なくて在されふとそ。ろぶ年なこのよろふはけそも
いふ老らぐらろひけん。えまくはしよ。かれ口説だ。吉次生て。ろのもろぐで
笑をれハ理なり。父も母も。いめるさ文永六年の秋れこ病。打つづれて世を去り
ろひ。某ま二郎ろ女児秋布という少女ハ取りつ。ろれま太宰の弐高湛友のゆえ
ふ四郎ろ女児秋布という少女ハ取りつ。ろれま太宰の弐高湛友のゆえ
めふよろて。某軍監ま撰出され。去年より矢田の毛ま有り。総角のひしょう。
母のろ生ろ。ろひ忘くて。音耗せんまも待
ろぶ。父拘くて。ぶ父拘くて。隣ハろれどろぶ父拘くて。音耗せんまも待
ろぶ。父世ふるくなりひても。月のかに遥ろ。海山遥み隔居れハそふのみ
ふて意ま仍せと。此度不意當國へまつれこそまされ。通往珠伏の後そ。
この便宜とりて。かろふひ尋はろくへ七。母も生も。縁倉へわくほろくへうとりひ
これふ。天つろ誠ふと憐こて。仇とぬろふとりくも。母ま環會したまり。


吉次雪天に宿を投
牛ふち九郎

欵びこれ亦そことわ。と縛審み物かくれべ玉鳴そ。健三夫婦う刻はっ
アそ。そやいくられ手を孑くれそ。じ」めてありていと。哀悼ふ愆ざり」ふ忽地
にらふやう。あまりに喜しさと哀しさにうち紛ま」
て内おごに俤ざり」。通宵路を走りるり。餓も疲労もおのひけあ。まつ足と
洗ふへし」といひけて。忙しく庖湢のかまへ走り入て。盥ふ一桶の湯を汲入れ。
これをりて生よ。斜ふ杓ふ杓ふ杓様のはうにさしかけ。吉次そ押いさふふく。
縁端ふ尻とかけ。雪に氷りて固ちなくなれ。草鞋の紐を解かしも紙窓ふ細め
に押開て。潜ふ張ふりのめりけて。乞するかち牛湖九郎清縄なり。清縄鷺ふ
吉次ふ追ふ。形蘭渡へ入なりぬそ。進退究まて。玉鳴ふ家ふ宿かり。瀬川ふ
先そそ。おくほりたれ処ふめりそも。あふにして吉次ふ目今足を洗へとき。
盥ふろれ面れそ。結とえて刀にまさかけ。そそ敵将牛湖も。この処ふめり
け私よといひせも果そ玉鳴ふ盥ふぶとうち復せぶ。彼処ふもまそ窓の
障子を内より破と引そそうこまそ。こく落ふもなれ笑ひ
ふ紛らし。寔に親子の水入ふび。今の湯ふあまりに熱し。さん汲入て進んせん。
とひつ桶を引抱そ。さんとそれを吉次ふ忙しく押とめ。いや湯ふ欲ちう
ふひて雪ふ細し」覓の水そ。潔けれ」とさしよせそく。盥に受る滄浪の。水
なふふくにつぶ足。洗ふ折しも浦二郎ふ拂もめくり。雪の蓑の下に瓢を
携て。ぬりふつ。と入れくに。又ひとりれ賓めりて。裡の容子の平ふふねを
不審こ。左右なくへ走りも入ふび。折戸の蔭ふ立在て。もど」窺居りける。
かくて吉次そ。母に誘引とて。地炕のほとりに對ひせし。さそいふやう。年来の
志願を遂ぐかく。環會ふあふせられど。親子とふくども。おのくその志とふ
ふり。國の為ふ分のふにゆくべふく。四

こゝろもゆるさせたまふうな。そらくさせ。その何を。といひも果ざるに
うつで。吉次ハ腰ゐ著ると云ル牛渕が。鎧ひ巾をとり出し。某が所存の一種ハこゝろ
この巾のぬーなり。ゐりて留めるひし欤。又ゐらぐで宿貸るひし。何ハあれ朝
敵経高が軍師ると云ル牛渕九郎清縄を舎義るひてハ。浦二郎がうへもよ縄し
かふび。親子兄牙の義ハ私るり。縛ゐようてハ牙ゐも。縄をかけゞれハ吉次が
軍監ゐうけるりなれうひもるく。不忠の人となりねぢ。とても脱ざれ天罰
のその首桶ハひ巾の盃子形。首うけとらしてまろれ。とさし出を終五郎ハまに
だふそふび。吟味ひ。こゝろひもかけねるぢ。子の難題ひ牙より外そろ家ゐ。
いる留ねとめふがひるふとも。盥ゐうろし水鏡楚と認く所望の首級ざは
そふぢぐとおくりのしまろぢ。奥へ踏ことこと擱捕ぢ。いうゆやいうてと結よそれが。
母そとかくの友答なく。ゐな寒ゆそ。折焚柴のゆーやぐろ。吉次

焦燥そ刀を引提つと立ると云ル折ーも。ゆよ結る兄君と呼びとめはゞ。
浦二郎ゐ物蔭よりゐふれ出養笠掻ひ巾ゐ。
吉次ふ對ひくいふゆう。幼ときに別ぢ。兄上ゐくおのそれはしそ。
只今彼ゐに竊ゆそて走り理めれひ巾の首補ゐ。この一瓢の酒ふ易く。
浦二郎ふるるぐば。喜びおりふ不るり。と述そるくく瓢を兄ゐさしよそれ
バ吉次見そ大ふ怒り。滑なる牙ゐ截断。兄ゐ傷ると瓢の狂水清縄ゐ首
ゐ易よくゐ。いゆくく不審。おのゐに洩もゐ経高ゐくらくをはして。北條家ゐ怒
すれとおび。忠義ゐ骨肉をもおりひうあれゐ武士の常なり。縛ゐよう
てゐ牙といゐさびぐそくく立と罵りて。瓢ゐ把く投著れバ酒ゐゐめくで
裡より歩れ。吉次が小刀を。浦二郎掻とりて。瓢ゐ截。ゆさびゐ兄がはとりにさしおれ。
い。ふ兄上こゝろや。ひ巾に易れこの小刀ゐ。ろる刃をとれ。父の像見とて

瀬川龍華に
牛淵と
戦ふ
牛ゆち九郎

せ川とゆめ

逃しぬ。この短刀と一對なり。四条牛渕が兜巾をとりぬく。牛渕又此刀の小刀ぞとぞ。おもひ出ぬ。只浦二郎がはうそにまぎらして彼奴に投て足に易志し又放しぬふとも敢忠義の虜れおあらん。兼ての心得なり。

といふせも果ぞ。吉次ひとら搦ん。牛渕が浦二郎。只一つの小刀が惜こそ。

追詰られて牛渕を放さんとて理り無益の勧解なに及ぞとのいざとらんと

いふまゝに席踏反して奥のかさへ走り入らんとすれば玉鉾瞬て。こはやまつた

と引袖ば。ふり拂へ又ふり攫れば浦二郎て撲地と突退て。岸破と蹴開

く蒸襖。小楠ふとり。牛渕九郎清縄ぬ引捉て立寄り。健氣なり

瀬川采女。これ狂るゞみのことに。犬馬の労を竭ふめるぞ。北條一家の古主

ぞ浦泰村ぬしの仇なり志ぬ切りて九州ぶ跋跡して輙く大将實政ぬ

撃ぬとおもひの外。却て計られて不覚ぬうなれこそ朽をしけれ。

今迄ぐ首ぬりて。今朝討ぬなれ兵士の。寃魂ぬ祀らぞ。何の時と期そべた。

とぼざれおおざれて跳ぬ出。刀を閃して砍んとすれば吉次飛退下て抜あひし。

丁ど打あひて發せじとて浦二郎そぬ。ぐ刀を捕に玉嶋も。左右と留ぬ。

留めうねられ勇士の刀尖。ここえてせんをべおうりけるかくて吉次清縄ぬ詈

撃突戦まを竭。何果べうもあらじが。牛渕やうやく腕撓太刀をとら

打ひて拄杖をぬ。泝川ぬうと踏とみて打人ともそれを丁ど受透を窺ふ

鍔窪ぬ両刀膠りて附られぬ。時ぬ玉嶋傷より。山躑の衣板ぬ含まく。

打ぬじられ太刀の間へ楯と投かけ。その刀ぬ壁ぬ喘く。中より打ぬ人とも。

れそ互に逼ろ声ぬうたて。ぬうらは牛渕ぬ素をかけて遍ぬしふぬ。

欲。いないぞう清縄ぬ搏ぞて。ぬうらばぬ瀬川を撃しふぬ欲。いないぞう子ぬ

いふ撃ぬじ。ここうにていその刀ぬ。よもぬの佐ぬ引ぬじ撃もぬ

裁判いかゝこそすべけれ。といひも果ぞ。ほどり近く落ちうそ流れが小刀
次ぎそれよりこそ〳〵咽喉へぐさと突〵ふれば。足いと驚く牛淵瀬川浦二郎ハ
猶さらに周章して。さもみ〳〵に勲れを。玉治ハ撥退て息吹吻とつゝ。てかれく
より光手あまり。絶て在処もさゝざりし。牙清縄。又音耗せざりし。我子来女
に。不思議ぉ環會おがら。過世あ〳〵て叔姪どち。敵身方と引これ。鎌次
前れ忠と義と。いつれをいづれとうれてかく〳〵。かり果れ玉鳴を牛淵が妙うり
やうよも吉次ハあらじ。といよ〳〵来ハさら〳〵驚ぃ。さうらふは敵ゐ牛淵
九郎ハつゞ母の才ぉて。吉次が為ぉハ外戚の叔父ぉてありしうとう〳〵いふぉ
さゞし呆ぉて黙然ふう。清縄そこの景迹ぉ数回嘆息し。噫伯姪。かく〳〵あれ
ぎしとそふながて。浦二郎よつぐ公中をぱえさゞし吉次が打かけ〳〵れ小刀と
信と。瀬川次誘引ぉよしとひつれるもあ雪の。ゐれ果取うれ最期
なう。抑清縄今さふ武うこ泪をうりて。鎌倉へ俟眉し。骨肉恩愛ぉ絆さん
て。かくふぉゐびれそ是二浦泰村譜代の忠臣岬平馬清廉が二男
なれだいうぉして北條氏よ怨〵て。古主の怨を復ごぞや。とおりひ定めるる
に。ゐる正元の夏長門なれ赤間関ぉて妍なこうしなひ。そのびも向ぶ崎
ぉて。龍神の教誡と稟一巻の秘書ぉさへ俵受せられ。且命運の待てを
さつく。復讐言のうぉぉそひそぼう。沉紫ふ到て〳〵責トぉ生活と忘れて
羊を狩の父。狩ふぉ嫌されて。此度の大事にふれとひぞも。経る鳥帯
獣心はして。これと共ぉ討れふ足ぶびされびとて一旦主従と形りくそ違
背をべれふぉゐびて所注時宗が親族〳〵れ実改うとも討とうく風志を
果さでやと尋思〳〵習ひうれ間諜の術をりて。転く讐課〳〵りとおり人の
外。却吉次ょ謀られて。死蘭渡の屯なう人責敗〳〵れ既ふ進退究てく。

あくに脱を乗てくかくしも。姉玉嶋小環會。瀬川健三がる。又その子ぞ。
のるの父ぜて。おくひめそれお。實政が軍監。瀬川采女吉次をろぶ姪うれ
事を知覚しとても死そぐた清縄が首ぜ。彼吉次ふろふせんこの紙。ひ潜て
浦二郎ふろふ孤を告。采女が打かけ小刀をりと。矢田のかこへ遣ーてるお。
縛絶ま相遠ーて。養育の恩そ親おも勝れ。城の自害もれ故と。やくへ
いそ罪ゆろれ。ぎの悪業そ悔てかくらぞ。清縄驚れうとゆえながら純百
が滅んる。瞳なめぐふさべかくに。そくく駐て高名せよと頂に伸そ合掌
そ。吉次そ。に。めて縁由ぜありて牛そく。嗟嘆し。幼ととき二親の物語おて
守れとためうそう実母をそのに。領中麓嶺の麓うれ濱添伯し。が
炊妾なれが。人肉経紀ま扮撃れて。彼地お呻吟。主人の憐愍をおく。その
久家にありけるぜが父母鏡の神ぜ示現おようて側室と。孫を産ーる人て
とぞ。さてそ赤間関おて。悪根お奪ひ去ふれ。ろびく離散ーるひくれ。同胞
母子半ぜ孫へく。環會めふひもおく。名告れが互ま讐敵よし。や忠義ぜ立れ
こも。母と喪ひ叔ぜ越てぜ。宮位俸禄も何うせん。若ーそりのい武士の。名のこぞ
後の絆なれと。ぎぜ悔て撃かねうり。牛淵ぜて声ぜみりま。こぜ女し。ろま瀬川
采女。清縄と弩編しても。後の軍功もいさばふなふん。忠義ま守ん道やる。
浦二郎もりおともに。これぜ撃て反逆の餘類を脱ま。兄吉次お従ひて。
鎌倉屋の御感ふめろれ。ろて刃と當ざれぞ。とひ動ぜ浦二郎ぜ瞼を
右びたくに。兄ぜともめれ某そ。いまざ仕ざれそのうひ。赤ぜ撃べて気死も口。
このつのこぜ許ーるくと。兼引きまこなかりしかば。牛淵大ふ焦燥て。彼も足
もひびひる。恩愛の己がくーて。ろが姉自害志ろくぶも。清縄と撃ばしてそ。
その死も又かひなれお似ろう。いざけふは牛淵九郎が刀の切ぬ試ん。とひひを

めくぞれとろ。腹へぐこと突たつれ。折しも門方より人ありて。吹ちさむ笛の音を。
たなびら龍の吟ぞれごと〳〵。怪〳〵ろ。一道の雲靄靆〳〵ら升
ア。又霏〳〵と降る雪こそ。遂ふ碎〳〵玉の屑或ハ神龍の空宙に戦ひ〳〵鱗を散もふ
と異なるふべ。親子同胞ともに。ふりさけれバ茅屋の檐の雲の霽まに目ぬ
かけて。吉次兄弟つと立めろ。侍へ笠岬龍村ハ龍神の子なれをりて。その子孫今
に至る。腹下に黒子あり。形離ふ似ろとうや。今清縄の痍ろり。雲氣玄冲ハ
方に是祖先の血脈をめふとその欲めるを奇なれうも。奇ろろと瞬もせぞ
うち瞻れバ母の苦した息の下に。身とて子どもえりて。ヌむじ赤面関ふて。
人肉経紀ふ指撃され。遠くこの肥の別ふ呻吟て濱添の禁妻となりしちめろ。
泰村やーの残黨なれハ。健三どの夫婦にもふ。親同胞をも故郷をも明白ふを
告ぐりごが。九年をへて今こに。彼ふ脱ぎぬ者の悪業古主のあふ捨れ余を。

何惜むぞれろろあれ。子ゆゑの闇に夜の鵄彼笛竹の音を聞くゆゑ歎いやまた
哀別離苦これも又道考めー。木綿妙ごの値偶の恩の復そとおりへうく
に喜ーくれそとかた口説苦痛ふいとど潰れ鮮血ながらの涙なり。かくハ吉次
も浦二郎も母のこ為をおりへごみ何と
撃もとめね後馬ふ。後とでと清縄そ吉次ふ対て声を励ーそれ昭夜侍
辺ふ追れーれとそ。潴ふこれ相とれバ辺遠かふべ。漾倉ふ帰るのりまる
不慮の厄難めり。これ避れるゑ甚かしこ只八の弓人をりてこれふ拠ろバその
禍を脱れるのこなふべ。却不思議の功をろろぎ。このゑ藤く浦二郎ふ教く。
その意をおさしたれが彼審にいふなるべし。又ろぶ龍神より侍受せ一巻を
侍へのの辺の外ふありともおぼえそ。今面のろ授んとすれバ朝敵ろる清縄
がまより。物ふ受れの傷難ふ厭ふなふべんより。てこの一巻ふ浦二郎ふろ

とかく倍々郎
牛若九郎

せ川うめ
せ川浦二郎

されぞ速に兄に贈りて。孝悌を全せよ。といひかけて。彼一巻を掻繩さし出せ
腕定めなく。手首なるへれ手負の苦悩。浦二郎とつて押戴れ。かくまで笑
理をおりひまゐなどて鎌倉へ降氣し。後栄をもかりまゐざれといひせも果ば
眼を睜。その何といふことぞ。始ありて終なれは。大丈夫の所為にあらざ。いざ
吉次首とつて実政の實撿に伎よ。といひつゝ刀を引まゐせば門なれ笛を
忽地に吹止めて高ゆうに。鎌倉よりおん使と呼門声に吉次は猶豫しかゆて
閃かせ刀の下に牛淵が。首を膝下に撲地と落共に倒るゝ玉嶋が刃を拔
ば息絶たり。吉次は目を押拭ひ。刀をおさめて牛淵が首級を跪巾に楚と押裹
注目されは浦二郎は走り出て折戸を開くにおりひもかけず博多倍太郎従者
僅に二三人を拐て。横笛を雄手にしつ。嬉てもてみ入て上座に押なほり。吉次
に對ていふゆう。時宗朝臣火急の召によつて。おん使をうけまゐり。夜を日に

継て今曉到る。鷹に実政ぬしに渇して牛淵没落のるを見て。辺の迹を
追ふて。こゝにまゐる折しも。屋の上に雲氣あり。車の為体いと怪しければ。
旅中の徒然を慰んとて携られ笛を吹て試れに潛龍庭より升て雲に
入れ形のごとし。當に是牛淵が隠家なりと猜し。まづ外面に立在て裡乃
容子を張へば。牛淵既に誅伏せ。こゝ是に辺の計策より出て。その功最
稱嘆するに堪たり。執權恩賜の錦の直垂。内室秋布の消息ことにあり。受
おさめて倍太郎とともに。鎌倉へとまりまゐぎしと説示せば。吉次も謹こて
主命をうけまゐりて。遠来の賜を拜受し。又秋布が書翰を受とつゝ。ほく
いふゆう。俄頃に鎌倉へ召かへされる。いまだその足非をおりひてれまへぞと
いへども。君恩かくまでに深かれは。あしれ勤にはあれべからず。しかりとも全く
朝敵を責滅し。九州を掃浄ぜして鎌倉へかへらんはいと本意なれ所為

なれど。因辞をもれにはしなし。こゝに九年来遠離られ。実母玉嶋に環會
ながら。彼義に仗て自害しをかんぬ。せめて野辺送の営をいとまで。しを
しの暇を放させまゐらし。と希ふに。倍太郎ゆゑて。かぐりれるゆゑ子細に及がぞ。
しからばこれは矢田に退れて待べれ。こゝ待しづかに葬を。なし果たまへ。と
慈つゝしれども。しらぬおかちし。徐くと立て帰りゆく。折目正しき長袴の
下括さへ武士の。毛臑吹きれ雪風に。路次の疲労ゆゑ勤アて式待してぞ
目送りぬ。

仇者云。前編三冊稿成て。まづ刊行を。こゝに述れとこゝ。稍央に
過ぎ。これより以下。瀬川采女鎌倉に赴く中途殃危にあふ。
及び瀬川浦二郎が傳。博多弥四郎讒死の弁。若黨俊平。簑七
が始終。秋布が艱難苦節。終に仇人嵐川嘉二郎。長城野兵太郎

擊て。名ゆゑ海内に高し。その後俳優瀬川路考。采女夫婦が忠節
心烈と。英才怜悧ゆゑ景慕し。瀬川と号し濱村屋と家称せしゆゑの
終まで。来載続て後篇に著をぎし。

松浦佐用媛石魂録前編下巻終

編述　著心半藁案

出像　一柳斎筆

傭書　石原駒知道

剞劂　小泉新八郎

右石魂録後編来冬遅滞出版其餘新編録于下

俊寛僧都嶋物語　曲亭主人著　来載出版

伊達與作驛馬新語　曲亭主人著　同　前

順補丸

[illegible]

○第一顔のいろ黄ばみむくさき足あびまほにかし
○息ぎましくあゆみがたく胸をたたぎうきあるみかし
○ものごと氣ぶまぶうかく寝るまと成このむよよし
○肩をまり背をぢ　いたさき足だるきよ　よし
○惣身血のめぐりあしく爪きつくかれうもくそるよし
○たちまち胸つかえむね痛を腹にかたまりあるよし
○積さしまみ氣をしらくむ孫やけおくび出るこしの
○胸水蓄んにて或ハ四五ヶ月又ハ二三年も経水を来ことよ
○常に大便むけつしづ泄う目まひ立ぐらみするなり
○さんご久しくひぐちかね労症のごとくぶらく頻ふにかし
○男女小児にかぎらず物ドセかれのきあしく何となく氣
ぶまぶうかく何病ひともいろらぜぶらくつ河らかな
此丸薬成用ひてかるらば全快するゆうこうひ如し

[illegible]

○凡病ひを患ふるの先此能書をよくしたるに我病ひに能あれ世一々にしたるに
此一ひつまみ毎に此薬に用ひあらて全快をなべし古今稀代の良薬之初二年
三年五年と種々にしたるに亦ハ妙薬奏薬にありたるに世に其ものを用
捨する奏薬とおもふ或ハ或ハけ遂その海に捨ふ者まゝ有ことに見然
薬用ひざる術ハやまひいよ〳〵深入り命我ちゞむるの元なり依之此病ひの事
方ハ能々此能書を合せしみ毎に用ひ全快あべし近ハ本能書に志ゆへ
○右に志るに風の病根ハ心氣はれ脾胃の労損より起るなれ三年五年諸薬用
治しかたく何程むづかしくも世の一剤あり二剤程用ひ速に治せる人ハ小半剤七日
用ひ全快あるとうたがひ奇効あり用ひて三日のうち大便ゆるく通じ是薬相応の事ゆへ
用ひ全快あるとうたがひ此順補丸ハ第一ひねをよく調和せるゆへ其ほとを増す
をしりぞけ血の気づりをよし下部をあてめ陽気順ゆるまゝ妙剤あり

本家　両國横山町二丁目　大阪屋半蔵

京都賣弘所　蛸薬師通東洞院東入町大和屋彦右門

大坂賣弘所　心齋橋通り博労町　河内屋重太郎

大藏永常著

田家茶話

繪入全五冊

此書ハ近きころ諸國の奇談因果物かたりの実説をしたるに志くわけめ繪入平かなしなり初章ふさと一世にて悪をしりぞけ善成ゆるぶ千一の珍書なり

何方の本屋にもあるゝに乃ち求めてゝ

貞松齋米一馬著

正風遠州流生花獨稽古

前編一冊
後編一冊

初心の見やまたしめひな形をもて花体
然ハ人に其技にしらせうためる体生
上りたる体それぞれに骨をわかれ師匠入
ずそひけらるゝ事ゆゑすぢを引ぎ

和漢書籍歌書儒書經書醫書其ハ雜書賣買仕ハ
和漢軍書繪入讀本貸本類　新古賣買仕ハ
曲亭翁画賛扇

見ハしあるべし爲にこひらけく英逸傳手のいとまゆられく經めらまてる紙已れが居るおいて詩文の需に応ずるものも其ハ常にかなりちゝみちゝ

東都書林

小傳馬町三丁目中程

文溪堂　丁子屋平兵衛梓